女鑑

明治廿六年六月五日發行

第四十號

東京國光社

女鑑第四十號目次

阿曇の總子媛



女鑑 第四十號

女鑑

二夫に見えず

二夫に見えずとは、東洋女教の骨子にして、全く西洋の風習と異なるところ、實にこゝに在り。然かるに、一度西洋風の入り來りてより、難きを責むるは、德を破らしむる本なりと唱へ、年若くして、夫に別かれたるものは、更に後夫を求めて配すべしとする論者、多く世に現れぬ。西洋の婦女なるものは、人類全體を見て、個人の觀念に乏し。これ西洋の女教が、到底、東洋の女教に及ばざる所以にして、西洋にありても、公平なる學者は、夙に之を唱ふるところなり。然かるを、東洋にありて、其の美なる所、其の長ずる所を棄てゝ、却りて、西洋の醜きところ、

劣れるところに倣はんとするは、誤れるの甚しきものにあらずや。近世有名の哲學者ショッペンハワー氏が、婦女を排斥せる有名なる論説あり。曰はく、婦女なるものは、人の種類を絶たさらんが爲に、此の世に生まれ出でたるものなれば、人類全體の思想はあれども、一個人の觀念なし、且、彼等は、男兒を擒にするを以て、目的となすを以て、他の婦女を見るに、總て商賣敵を以てすと。古今婦女を排斥したるもの、ショ氏に過ぐるはなきなり。去れども、若、氏をして、日本の女俗を見しめたらんには、なか〱に、此くの如き言をば發することなかりしならん。我が邦の女俗は、之を西洋に比すれば、束縛甚しきが如しと雖も、又、之を、他の亞細亞諸國に比すれば、寛優甚しきものといはざるべからず。即、我が邦には、自、御國ぶりなるものありて、儒教、回々教にも倚らず、又、耶蘇教に

もあらざる、寧、彼れをも此れをも折衷したる如き女俗あることなり。これを是れ知らずして、女教を說くは、嗚呼の業にあらずや。

我が邦にて、婦女の、公然交際場裡に周旋することを許さゞるは、古來よりの仕來りにして、こは、全く西洋に反するところにして、或は、今後の時勢に合はざる如き觀なきにあらざるも、時勢なるものは、人力によりて、如何とも左右し得らるべきものなれば、婦女の、公然交際を司ることにして、若、害ありと思はゞ、之を止むること、何の苦もなきことなり。況んや、我が邦の婦女が、交際場裡に於いて、不得手なるが如く見ゆるも、原、其の任に堪へざるが故にあらざれば、公衆の寄り集ふ間にこそ、遠慮もすなれ。親戚故舊の間に在りては、毫も、儒教的、回教的の虛禮頑習なきに於いてをや。

さて、東洋女敎の骨子たる、二夫に見えざる風習は、シヨ氏の攻擊に反して、其の一個人を重んずる意を表せるものにして、彼の富貴を逐ひ、才色を較して、朝に李郎に契り、夕に張生に嫁する陋風と、いたく異なるところにして、再醮は、日本婦女の、深く耻辱となす所なり。我が邦は、人倫を本とし、近きより遠きに及ぼす主義なるを以て、西洋の惡平等の弊に陷らざる所以も、實にこゝに在り。吾人は、貞女二夫に見えずの古訓は、必、之を永遠に維持せさるべからずと信ずるは、これが爲なり。

論說

琉球女子風俗の一班（第二）

椿　蓁一郎

此の地も、また南洋諸嶋に似て、手甲に刺繡するなり。大嶋の方は、其の紋様に、粗密數種ありて、之を楷行草の三体に別ち、其の手術、粗なるは賤しく、密なるは貴し。粟三升を投ずるは、最上のものなりと云ふ。沖繩の方に行はるゝは、其の文皆一やうにして、大島のに比すれば、頗る簡單なり。其の墨色は、濃きを貴ぶがゆゑに、年を經て、漸く薄くなるときは、再び墨をさす。年長じ、再三再四、回數を重ねしものは、殆ど手甲の全部、黑色となり、見苦しきこと、云ふばかりなし。然れども、土地の人の眼には、是も、亦愛敬を添ふる必要の裝飾たるなり。

北海道の土人も、また手甲に黥し、且口の周圍にも、菱形に墨を刺し、間には眉毛を繋ぎて、一文字となすものあり。其の方法は、剃刀を以て、縱横に疵を

附け、其の痕へ鍋ずみをすり込むなり。穢醜更に沖縄にこゆ。余去歳北海道を巡りしとき、屢土人の部落に入り、其の住居を訪ひたり。一日、石狩國上川の土人の酋長、ヨモサクなる者と對話し、婦女の入墨するは、何のためなりや、又其を見悪しとは思はずやと問ひしに、彼は云ふ。猶シヤモ（内地人を云ふ）の眉を剃り、齒を染むると同じく、何の理由もなけれども、古よりの風習なれば、少しも奇とは思はずと。抑歐米人の蜂腰、支那人の馬蹄、皆其の土の風習にして、別に仔細あるにあらず。余は何なる國に限らず、只管陋俗弊習に安んずるを善といふにはあらざるも、無下に他國の風習を笑ひ、または、濫に之に倣はんとするものを陋しむ。

女子の物品を運搬するに、重きは瓦石、豚兒、魚介に至るまで、輕きは衣袂の

間にも入れ得べき微細の物も、皆之を頭上に載せ、傘を除く外、一切手に携ふることなし。其の重量は、男子一人の負擔に比敵すべし。徒跣にして、身を直しうし、腰を据ゑ、頭を平にして、躁がず遽かず、態度悠暢、行歩頗る巧なり。沖繩に航する途中、同船の客、鹿兒島人某の話に、琉球女子は、坐作嫺雅にして、氣韻高尚に見ゆるもの多しと聞きしが、大嶋より那覇に至りて、實に其の言の虛ならざるを知れり。凡そ琉球女子の行歩するや、身體を直立し、俯せず仰がず、左眄右顧せず、徐々歩を進む。其の室内にあるときも、起居閑雅にして、促迫ならず、勞作をなし、物品を扱ふときも、濫に首を垂れ、体を屈せず、如何にも從容として、氣高く見ゆるなり。無敎育の賤女が、何どて斯くの如くなるやと考ふるに、敢てあやしむに足らず。全く平生物品を、頭上に載せて步

行することの慣習となりて、自ら態度の優美をなせるなり。依て思ふに、學校に於いて、女子に課する體操は、擧動を粗暴にするとか、武骨にするとか、批難のあることとなれども、其の方法さへ適當ならば、姿容を優美にし、動作を都雅に導くの實効あるは、琉球女子の風に徴して、疑ふ可からず。

髪の結ひ様は、前にも記したる如く、老弱、貴賤、都鄙の別なく、一様にして、之を留むる二本の簪も、身分に應じて、地質に差別こそあれ。其の形にかはりなし。毛髪は長くして漆黒、其の美なることは、此の地の特質なるべし。其が上に、一般にかもじを添へ、鬢附油を塗り、髻を額の上に結ぶ。賤女は根をゆるく結ひ、物品を頭に戴く時に、後に垂るゝやうにす。結び方は、至て簡易なるが故に、間々樹下石上憩休の間などに、ゆひ直すものあるを見る。されば、如何なる

僻村、如何なる貧女といへども、見惡しく鬢髮を乱すものあることなし。内地にて、纔に村落等に入るときは、蓬々たる乱髮、見るもいぶせき姿をなすもの多し。琉球の簡にして潔なるにおかず。

産婦あるときは、日々親戚のもの集り來りて、産婦の周圍に團坐して、酒を飲み歌をうたひ、又盛んに炭火を燃して、生兒を床上に置きてあぶること、一七日にして止むといふ。盍炎熱の地なるが故に、生兒をして、能く氣候にかちて、成育せしめんとするの意ならん。奇と云ふべし。

田舎には、間々いとふべき惡習あれども、概して夫婦の愛情厚く、卑賤の者も、再嫁するは少しと云ふ。又尾類といふ娼妓あり。貴賤となく、之を翫ぶと雖も、納れて正室とするものなく、又妓の廢業の後、家に歸るも、之を娶るものなし。

獨居生涯を送るを常とす。

絶海孤嶋の風俗、固より取て以て、摸範とすべきものありといふにあらざるも、寡婦の再婚せざるが如き、また男子の、娼妓を娶らざるが如きは、以て美と稱するに足れり。世の名族縉紳と稱せらるゝ者、歌妓賤娼を買うて、以て正室となし、靦然羞とせざるに比すれば、其の優劣、果して如何ぞや。常に名利を事とし、豪奢を競ひ、禮節を蔑にし、風俗を敗り、而して揚々人に傲るの輩、少しく琉球の風を鑑みて可なり。

（完）

女子要言　第二篇（十二）

三輪田眞佐子

第三　經濟。　茲に吾が經濟といふは、金錢、勞力、及び時間を總稱して、無益に

用ゐざるを云ふなり。而して其の金錢の經濟に於いては、女子は、殖産工業の正面に立ち、貿易し、建築すべきものにあらざれば、從うて、米相場にて贏得するとか、株劵にて利益を取るとか云ふ如き、積極的の殖産をなす能はず。唯吝嗇に陷らざるを制限として、成る丈の節儉質素を以て、消極的の經濟をなさば、先足れり。這は日時の食物より、衣服に至るまでに應用して、大切なるものなり。而して其の節儉の効德たる、其の人をして、反て豊富の感あらしむるものなり。何となれば、節儉なる概念、心に存する人は、三伏の候、既に冬衣を用意し、客未だ來らざるに、已に豫め準備をなすを以て、轉々狼狽の憂なし、蘇東坡の後赤壁賦中に言あり。客曰はく、顧ふに、安んぞ酒を得る所なからんやと。歸りて而して、諸を婦に謀る。婦の曰はく、我に斗酒あり。之を藏むる久し。以て子が不時の需

を待つと。宜しく女子は斯くあるべし。且節儉を行ふは、我が身を安全に處せしむるものなれば、古より賢母賢婦の名あるもの、必ず此の心あり。明帝の后馬氏、謙抑節儉にして、所親に私せず。而して且曰はく、吾天下の母となりて、衣服は大練、食は甘を求めず、左右は、但々布帛を着て、香薫の飾りなきものは、身を以て下を率ゐんと欲するなりと。柳公綽の妻韓氏、家法嚴肅儉約にして、常に綾羅錦繍を身に纏はず。歸覲する毎に、竹兜子に乘れり。或時は、苦參、黄連、熊膽を粉にして丸藥を作り、之を諸子に與へて含ましめ、永夜修學の勤苦を助けたりと。我が邦今日の婦女、少しく省みるべし。歐米の某家政論に見ゆる、小事も大事の如く注意し、買物をなすに先ちて再思せよ。安値の故を以て、無用の物を購ふ勿れといふ三原則は、誠に彼是口實を設けて、奢侈に馳せ易き女子の爲、善き

戒言と信ず。而して是等は、固より些少の事なりと雖も、大堤も蟻穴より壞れ、塵も積もれば山となれば、其の初め小なるを以て侮るべからず。大抵一家の衰微は、日常小事の儉約をなさゞるより生ず。松下の禪尼が、自ら障子を繕ふも、其の意茲にあるを知らざるべからず。思ふに、若贅品を買ふ僻心起らば、其の時再念せば、自然良人の譴責を免るゝならん。亦幾程安價なりとて、徒に物を買ふは、恰も其の代金を捨つるに等し。戒めざるべけんや。時間に於いては、決して今日ありと雖も、明日ありと云ふ勿れ。一日に、一時の時間を儉約するも、之を一年に積もり、一生に數へなば、幾何の長壽ぞや。加之、主殿寮に燭を要するは、事務の運ばざると同じく、一家に於いても、格別の多忙なる務なくして、朝夕の別なく喧噪するは、其の家婦女の人となりを知るに足る。凡一日の務は、朝にあ

れば、夙に其の覺悟にて、速に業を營なば、客を座に引いて、后走りて茶菓を買ふ不体裁はなかるべし。或は一般の業務と、其の巧拙、及び順序に由りて、頗る苦勞を省き得るものなれば、其の秘傳をも心得て可なり。

第四　攝生。　女子の是非知らざるべからざるものは、衛生、及び看護の一般なり。夫れ衛生は、生命保全の術にして、老若男女の區別なく、各人の心得べきものなるも、如何せん。專門の醫師にあらざれば、其の全局を知る能はず。然れども、殊に女子は、己れの世務上、直接にして、且必要なるものゝみは、少しも知らずしては不可なり。而して其の知らざるべからざるものは、一、飲食、及び空氣と、人身との關係なり。若之を知らされば、小兒の健全發育を適當に計り、一家族の疾病を、未萌に防ぐ能はず。例之ば、コレラ病流行の如き時、貝類、又は强飯等

を製し、遂に病の原因を造り、愛子に餅菓子等を、過度に與へ、胃弱症にせしむる如きは、婦女恒の過なり。二、身体と外物との關係なり。大抵の傳染病は、不潔物の紹介より來る等の次第を知らざるべからず。然らずんば、汚衣を洗ふの怠りを生ずる如きことを免れず。三、身体姿勢、及び使用等を注意すべし。即ち小兒の前面に屈する習慣をなし、胸部の發育を妨げ、肺患等を招くものあり。或は寒暑の度を察せずして、氣候を冒し、以て不法に勞働し、身體を害する等は、悉く衛生法の如何たるを知らざる婦女の罪たるを免れざるものなり。故に女子たるもの、必ず此の學をなさゞるべからず。若此の學をなさゞらば、其の家の病床を納むる時なきを以て、幸福の生活をなす能はざるべし。

看護は、女子の天職中、最なるものなり。實に女子の温和の言語、優輭の擧動、

加ふるに、忍耐ありて以て、病者の苦痛を減せしむるの感あり。然るに、無學の女子、稍もすれば、瘧症を以て、靈魂の祟と思ひ、祈禱を僧侶に頼み、疫病を以て、惡魔の障と考へ、神前に供する汚水を呑ましむるあり。甚しきは、腸窒扶斯に、不消化物を多量に進め、溜飲に、味噌汁、及び餅類を與ふるものさへなきにあらず。此等の女子は、其の心如何に親懇なるも、介抱の道を知らさるより、反りて害毒を與ふるに等しければ、看病學の一端をも心得さるべからず。當今の女子は、恐らくは、斯くまでの過はなかるべしと雖も、未だ臺所の流しより、湯殿、及び便所の清潔法まで、女子の任務たるを知り、且實行するものは少かるべし。」

第五　其の他、家内一般の整理、及び監督。　蓋し女子も、人事の半は、自ら務むる責任あり。而して家事は、其の半以上に居るものなれば、家政一般を全うせ

は、殆ど已れの職分を盡くせりと雖も、此等は、頗る湖濶の業にして、一言にて逃べ難し。又其の秘密の法を明かす能はず。抑も男子は、天性粗野のものなり。女子は、周致のものなり。左れば、其の性を利用するは、天の道にして、即ち女子の道なり。故に女子たるものは、取扱、及び使用法、客室、寢室の整頓より、掃除法までを辨ふべし。茶碗に破目多く、揃ひたる膳椀の完備せざるは、女子の恥なり。土藏の戸始末、裏口の蝶鉸を忘るゝも亦然り。玄關に雀巣を作り、蜘蛛の網に遊ぶも亦然り。其の他、火の用心より、薪炭の用意、水甁、及び釜烟の掃除より、火の焚き墉梅、粗布の使方等、逐一法あり、術あるなり。果して之を知り、之を行ひ、以て男子の取る外事と、輕重難易を比すれば、兄たり難く、弟たり難きものなり。何を以て、男子の其の妻を、米食虫と罵るあらんや。厄介者

と怒るあらんや。則ち女子女藝をさへ全うせば、男尊女卑の嘆なかるべし。女權擴張の必要去るべし。亦快ならずや。吾此の女藝に就いて、詳論する志切なりと雖も、固本篇の目的にあらざれば、讀者了せよ。

史談

阿曇の總子媛

三橋要也

むかし、應神天皇の御時に、阿曇の總子媛といへる女ありけり。阿曇連大濱宿禰のむすめなり。いとけなきより、才すぐれ、識かしこくて、よく、物事のゆくさきを明にし、人のいまだ、思ひ至らぬ事に心をつけてつとめしが、よくかなひて、過失なきことと、神明の心に通へるが如くなりき。されば、容貌は、よしといふにはあらざりけれど、天皇召し出でさせ給ひて、宮の内の政をはからはしめ給ひぬ。總子媛、大君の御恩をかたじけなみ、ます〱、婦道を明にして、宮人を敎へ導きしかば、

後宮、いとよく和ぎ治まりて、いさゝか、邪の事なかりけり。

此の天皇、御位に即かせ給ひて九年といひけるに、武内宿禰を筑紫に遣はして、りしこの民を治めおきてさせ給ひき。時に、武内が弟甘美内宿禰といへるもの、兄を、天皇に讒ち申しけるは、「武内、つねに、天が下を得んとの心あり。此の頃、筑紫に在りて、新羅百濟高麗人どもを語らひ、御代を傾けまゐらせむとてこそ謀り奉れ」と、誠しやかに言ひければ、天皇、いたく驚かせ給ひ、やがて、石川宿禰を討手の使とし、軍兵どもを副へて、筑紫へ向はしめむとし給へり。この時、總子媛、いかゞ思ひけむ。御前に參出て諫め申して曰へるは、「甘美内が申すこと誠しからず侍り。畏かれども、よく、御心を定めて思しはからせ給へ。そのかみ、天皇のいときなくておはしましけるを、大后、筑紫よりゐて歸らせ給へる折しも、麛坂、忍熊の二皇子、軍を起して道にて取り奉らむとしけるに、武内は、天皇を懐き奉りて、南海をめぐり、紀の國にて、軍兵を催し、つひに、二人の皇子を討ち平げて、天皇をば、御位に即け奉りしには侍らずや。もし、武内、まこと、天が下を望む心の侍りなむには、この時にこそ、天皇を、いかにともし奉りて、御國をも奪ひ申すべけれ。さるに、天

皇の御世治し給ひしより以來も、ひたぶるに、御政を輔け奉り、國民を治むるに、誠を盡くして、つゆ、私の心をもち侍らず。さいつ頃、大勅を承りて、筑紫へゆき向ひ侍りし時、暇申して罷り出づとて、大宮の御前に跪きて伏し拜み、涙を拭ひて立ち出で侍りしを、妾、まのあたりに見及び侍りぬ。これ、正しく、忠誠あるしるしに侍り。さるを、今、忽に討ちとり給ひなば、恐らくは、乱のはしともなりぬべし。上明ならずば、下治まらず。臣くらからば、國安からずところ申し侍れ。武内は、物の道理を知りて、よく、國民を治むる臣に侍り。よく、御心を定めて、おぼしはからせ給へ。みだりに、忠臣を失ひ給はゞ、後の御悔、いと甚しうもおはしぬべし」と、言葉を盡くして申し上げぬ。天皇も、おほ御心すぐれて明におはしゝかども、いかなる群雲かに、しばし蔽はれ給ひけむ。ひとへに、甘美内が、うまき言の葉を信ひ給ひ、「そは、汝等が知るべき事にあらず」とて、つひに、軍人をつかはし給ひけり。

武内は、筑紫にありて、この事をきゝ、いたく、うち慨きていはく、「我、年ごろ、二心なく、天皇に仕へ奉り來つるに、今、何の禍にか。罪もあらずて殺されむとはす

るぞ。さりとて、官軍に向ひては、弓ひくべきにあらず。君、たとひ、君とましまさずとも、臣は、いかでか、臣たらざるべき」とて、自死なむとしけるを、壹岐直眞根子といへるもの、武内が、罪なくて死なむとするをいとをしみていひけるは、「大臣は、天が下の棟梁と頼みまゐらする所なり。今、寃罪の爲に死り給ひなば、國民の望を失ひて、後には、天皇の悔い給はむ事も、いと深かるべし。我が容貌、よく、大臣に肖たり。御命にかはり申すべし。大臣は、ひそかに、都にまゐのぼり、罪なき由を奏し上げ給へ」とて、劍に伏して死りけり。かくて、武内は、ひそかに、都ににげ上りて、身のありさまを訴へ申しぬ。天皇、やがて、甘美内を召し出で給ひ、互に、辨論はせ給ひしかども、わき難かりければ、磯城川の上にて、神に盟ひて、探湯せしめ給ひしに、甘美内、つひに、うち負けたり。武内、これを切らむとしけるを、天皇、ゆるさしめ給ひて流しやり給ひけり。さて、武内をば、元の如くにいつくませ給ひ、さきに、總子が申しける事、いとよくあたれり」とて、感賞給ひけりとぞ。

すべて、女は、内の事を司りて、外の事に關はるべきにあらずといへば、總子媛が、

天が下の事につきて、かく、諫めだてしけること、いかゞと思ふものもありぬべけれど、そは、又、場合にこそよるべけれ、平常のつとめは、内にありて、外には及ぶまじけれど、女なりとて、國の爲、家の爲、危き事どものいで來つる折などには、その思ひはかれる事を、君親に向ひ、夫に向ひて言ひ出でむに、何のあしき事かあるべき。さて、聽かれざらむ時に、爭はでうち控ゆるぞ、誠の女の道にはありける。總子媛が、武内宿禰の過去を思ひて、今をはかり、さばかり賢き大君をも欺き奉れりし甘美内が言葉を誠とせで、諫を納れ奉りしが如きは、もとより、天稟の賢きにて、尋常の、心淺き女どもの、かけても及ぶべき事にはあらねど、それも、身に相當き學問して、知識を開き、大方、物の道理を明らめ置きなむには、いつかは、又親夫の過をもすくひ得て、家の爲ともなりなむかし。

小萬

柴田龜太郎

婦女たる者は、温和にして順良なるがよしとはいへ、事ある時に恐るゝものは、また賢き德ありとはいふべからず、しとやかなるが中に、をゝしき動きなき眞心を備

へてこそ、賢き徳ある婦女といふべけれ、此の眞心ぞ、やがて、夫に仕へては貞となり、君に仕へては忠となり、また義ともなり、順ともなるなり、さるに此の理をも知らで、婦女にあるまじき業などいふは、傍痛きことになん、されど、そも、常の行ひにてこそよるべけれ、

こゝに慶長の頃、豊臣秀頼に仕へて、大坂の城中におはしゝ、攝津の國の城主某といふ君ありけり、そが北の方も、夫君に從ひて、そこに籠りゐたまひしが、城中にては人の心さま〴〵にて、よからぬことのみ多ければ、君は度々直諫せられしかども、一も聞れざりしかバ、世を頼みなきものとおぼして、何處へか跡をかくし給ひぬ、北の方は、八才の兄君と、三才の妹君と共に、跡に殘され給ひ、押しこめられておはしゝが、朝夕に、夫君のことのみ慕ひて、思ひ煩ひ居たまへり、その召仕に、小万といふ、いとまめやかなるものあり、悲しきことに思ひ、かにかくと慰めまつりしが、やがて忍びやかに、君の清水寺におはすよしを聞き出でゝ、如何にもして、此の城をだし奉り、夫君の御傍に送らバやと考へ、間道など、あなたこなた探しあるくこと、度々なりき、或日ふと思ひつきしは、城の水門より抜け出でゝ、淀

川を走らバやすかりなんとて、其の案内など定め、この事北の方に申して、調度衣服などの類は、袋に入れて、或る雨風烈しき夜、自ら水門を泳ぎいでゝ、淀川を登り、岸の木立繁きが中に、この袋を隱し置き、小船の主なきを搜し求めて、己れは水にひたりながら、この舟を押し行くほどに、棹も流れ來ければ、これを拾ひて、人目にかゝらぬ樣、舟を繫ぎとめて、さて北の方には、妹君を負はしまつり、自は兄君を負ひて、辛うじて城を出で、舟に棹して川を登り、袋とりいでゝ、女房などの、物まうでするさまにもてなし、清水の方に向ひていでたゝしたり、折しも秋の中なるが、月の光はくもり勝にて叢にすだく虫の聲、上葉そよがす荻の上風などとりませて、あはれはいとゞまさりぬ、

かくて山崎のほとりまで來給ひし頃、いとむくつけき男の、思ふ所ありげに、後さきにつき來たるが、五條のあたりにて、かの男、わるもののあまたかたらひて、道を遮り、聲荒らげ、我の鋭き眼もて、たゞ人ならずと推し侍りぬ、いでや生捕りて訴へ出で、賞を受けん、はや縛にかゝれと、どよめき叫びて圍みければ、北の方は聲鋭く、女小供と侮りて、無禮なせそと、小萬諸共に、懷劍拔き放ちて睨まへたま

へど、事とも思はず、手どりにせんと寄せくれバ、やむなく勢猛く切り立てつ、暫し爭ひ給ひしが、北の方、小萬もいかに猛しとも、彼方は多勢なり、遂に若君を奪ひとり、逃げんとするを、あはやと、北の方は走り寄り、人手に渡し耻させじと、賊が首を刺しつらぬき、若君をも一刀に切り給ひ、はや是までと思し定め、最後の供奉せよと、直に四人を切り伏せ給へは、小萬もまた、六人を切り殺せり、其の他手疵を負ふもの数知らず、皆ちり〴〵に逃げ失せたり、北の方は、数ケ所の手疵に堪へ兼ね、地に倒れて苦しげに、あはれ君に遇ひ奉らざるとの無念さよ、せめては妹なりとも見せ奉れとて、はかなく息は絶え給へり、小万はなきからにより伏して、共に御供つかまつらんと泣き悲しみ、暫しが程は、物を辨へざりしが、妹君の、同じく悲しみ給ふさまを見るにつけても、胸はさくるやうに覺え、吾なかりせバ、此の君は、如何に為給ふらん、かにかくに、此の君を渡し參らせてこそとて、やがて心を取り直し、あたりの寺を頼みて、衣裳などを布施として、かくしまつりぬ、あはれ朝夕かしづき侍りし北の方に、別れまつりし小万の心やいかなりけん、

さて、こゝはいづこぞと問へバ、清水寺なりと答へぬ、小万は、また涙の袖をしぼり

ぬ、思へばいたはしの御事かな、やう〳〵この處まで來たまひて、君に逢はで消えたまひし北の方の、いかに殘りをしとや思しけんとて、泣き伏しぬ、かくて尋ねまゐらせて、妹君を渡し奉り、涙ながらに、さきの有様を述べ終りしその胸や、いかに苦しかりけん、げに忠よして勇に、雙なき婦とこそいふべけれ、

家政

看護法捷徑（十七）

三笠舍主人

第二編　治療の輔助（つゞき）

（五）灌腸法

一　灌腸法とは、器械を用ゐて、藥液を肛門より腸内に灌注する法を言ふ、此目的種種あり、之には灌腸器と名付る器械、又は灌水桶を用ゐる、

二　大便を通痢せしむる目的にて、此法を行ふ事最も多し、之を催下灌腸法と云ふ、淨水、微温湯、石鹼水、其外種々の藥液を用ゐる、又頻數の下痢を止る目的にて

行ふを、止下灌腸法と云ふ、之れには燕麥煎汁、澱粉液、亞麻仁煎汁、其外種々の藥液を用ゐるなり、其他、腸內の病の治療の目的にて、多量の藥液を腸內に注入する事有、是を注腸法と云ふ、

病に依りて、病者飮食する事能はず、或は大病の後、著く衰弱するものに在て、滋養の爲に、肉羹汁、卵黃、若くは乳汁等を、腸內に注入する事有、之を滋養灌腸法と云ふ、

三 灌腸法を行ふには、先づ豫め便器を備へ置き、(上圊し得るものは備ふるに及ばず、)次に醫士の命じたる度に從ひて、藥液の溫度を撿し(驗溫器を用ゐるを確實とす、通常は人体の溫度と同位の溫度なるべし、)其後、是を灌腸器に盛り、其管端(肛門に挿入すべき部)に油を塗るべし、病者は成るべく、臥蓐の側緣にありて、必ず右臥せしめ、膝を屈げて、臀を褥の外に出さしめ、褥上には油紙を敷きて、汚染を防ぐべし、此くして、看護者左の拇指と示指とにて、臀肉を排開き、右手に灌腸器若くは灌水桶)を採りて、先づ嘴管の口より、二三滴の藥液を排出して、液中に含む空氣を除きて後、徐に嘴管を肛門內に送入する事(少しく後方に向ひて送入すべし、)

大約一寸斗にて止め、更に左手にて、灌腸器の筒を握り、右手にて器の柱子を徐に押し進むれバ、藥液次第に肛門内に灌注するなり」右は銅製の灌腸器の用方にて、若しゴム製のものならバ、嘴管を肛門に送り入れて後、左手にて管を撮みて、其脱出るを防ぎ、右手にてゴム球を縮張して、藥液を送るべし」又灌水桶を用ゐる時は、左手は前の如くし、右手に桶を取りて、高く掲げ持ちて、藥液を流入せしむべし、此時は、一時病者に呼吸を停めしむべし、然らざれバ、藥液肛門より反流し出る事有、

四　痔疾其他の病に依りては、往々肛門緊く閉ぢ、又は痛みあるが爲め、嘴管入り難き事有、此時は、油を十分に肛門に塗り、嘴管を少し回轉つゝ、極めて徐かに送り入るべし、

五　病に依りて、右臥し難きものは、仰臥せしめ、兩脚を開きて膝を屈めしめ、臀下に軟かなる枕を敷き、其部を高くして、灌腸すべし、

七　灌腸終る時は、病者は十分衣衾を被ひて、其儘靜に側臥せしめ、可成便意を忍びて、久しく藥液を腸内に留らしむべし、若便意忍び難き時は、暫時臀肉を双方よ

り合せて、壓迫するを良とす、

(六) 温煖法

一 病に依りては、往々体温大に降る事有、此時は必ず人工にて、体温を昇すを肝要とす、之を温煖法と云ふ、其法は、尋常綿若くは「フランネル」等を、十分に四肢其他に纒ひて、体温の放散を防ぎ、又は適宜に温めたる砂、糠、等を嚢に盛りたるものを貼し、或は温石、又は湯婆を用ゐて、温氣を身に與ふるなり、

二 凡て此等の温めたる物を用ゐるには、注意して過熱を避くべし、特に湯婆は、栓を固くして布片に包み、温石は燒きて後、一旦水に沒して後、布片に包みて用ゐるべし、然らざれバ、誤て湯傷、火傷、を受るの恐あり、

三 此等の温煖法は、体温下降の外、又胃腸の痛みある等の時、腹部に用ゐて、痛を緩解す、腹部に用ゐるは、通常温石又は糠、粥、等を温めて、布片に包みて用ゐるを良とす、

料理法増補(三)

待月芽

おなじく

向附　鱧のかき身、木くらげ、たで、青酢みそ、

汁　さやゑん豆、松露、

椀盛　わかめ、いせ海老、竹の子、さゝがき、

燒物　青鷺骨拔、

吸物　ゑぐみ、はり生が、

八寸　からすみ、そら豆。

おなじく

向付　鰻付やきはそく切、配酢　おろし大根、まつ菜、

汁　蕗、ゑめし、小豆、

椀もり　ひらめ、すだれ麩、午旁せん、

燒もの　鯛こぶむし、

吸物　鷺ゑらす、

八寸　さき海老、黒くわゐ、

おなじく

向附　鯉糸作り　いり酒　子もぶし、いはたけ、しそ、

汁　赤みそ　新わかめ、うど木口切、

椀盛　あひかも、いとねぎ、松菜、

焼物　大海老付やき、

吸物　はらゝ子、

八寸　蛤、粒しひたけ、

おなじく

向付　鱒作り身、いか湯引はそく、みる、いはたけ、いりざけ、

汁　合みそ　えむ豆、干瓢、

焼もの　あじさん椒　醤油つけやき、

椀盛　たいらけはしら、ゆば、きく菜、

吸物　萱の實、

八寸　小鮎、松露、

おなじく

向附　あらひ鱸、たで、鷄頭のり、わさび上醤油かけ、

汁　からしる、蒟蒻ちぎりて、ぐるみ、青菜みしん、

椀盛　海老、氷豆腐、隱元豆、

吸物　雲母、

八寸　鮒の子、燒ゆば、

おなじく

向附　白うを蒸して、よめな、いはたけ、

汁　竹の子せん、落しからし、

椀盛　きすご、ね芋、燒豆腐、

燒もの　鯛、山椒醤油付やき、

吸物　さき梅、おろし大こん、

八寸　卷ゆば　煮付、小海老、

おなじく

向付　鯃しろ水にてよく洗ひほそ作り、たで酢みろ、木爪、みる、

汁すまし　椎たけ糸、めうがたけ木口、ゆば糸、わらせいとう
椀もり　鯉子籠　こくしやう、白みそ、實さんせう、
燒物　かれい一しほ、
吸物　水せんじのり、
八寸　煎海鼠、空豆、

おなじく

向付　さき海老、くらげ、おろし大こん　配酢、青まめ、わさび、
汁　茄子、またゝび、
椀もり　鯛、午蒡糸、燒麩、
燒もの　ばん骨拔、
吸物　むきしゞみ、
八寸　わはび、くるみ、

家政雜事（四）

糊、すべて糊を煮るには、余りつよからぬ火にて、絶えずかきませて、ぶく／＼と泡だち、しやもじにても箸にても、付けてあぐれば、糸の如く、細く引くを度とすべし、火より下してのちも、冷めるまで、かきまはすべし、押糊もよくねりて、糸の如くなるがよし、但しものによりては、さやうにならぬもあるべし、

生麩糊、生麩一合に、水三合の割合にて善し、之を三倍みづといふ、但しこれにては、ちと強過ぎることもあり、煮たる後、ほどよくときてよし、糊をとくには、水を少しづゝ入れて、追々にとくべし、一度に多く入るれば、とけがたきものなり、押糊をねるにも、少々づゝねるべし、力にまかせて、一度にねらんとすれば、かへりて、よくねりがたし、板目紙などを張るには、三倍水の糊にてすべし、糊うすくては、間よりはなれやすし、

澁糊の代用法、常の米の糊に、酢を和せて、よくときて、是にて紙をつぎ、雨障子などを張るべし、容易に離るゝことなし、又常の米の糊に、五倍子を入れ、よくねりませて、紙をつぎ、障子を張りなどするに、離れざること、前の通りなり、

早糊、籾をよく煎りて、之を細末にし、紙袋にいれおきて、不断懐中すべし、入用の時、取り出して、水にてとかば、早速に糊になり、急場の間に合ふものなり、

虫のくはぬ法、印刷に用ゐるインキは、虫のき

らふものなれバ、古新聞などにて、着物などつつみおかバ、虫よけとなるものなり、

學園

本邦女子文學略傳（第四）

目黒和三郎

菅原道眞母

道眞公の母は、伴氏、參議從三位刑部卿是善公に嫁して、道眞公を生めるなり、才德共に高く、殊に和歌をよくす、清和天皇の貞觀元年、道眞公十五歳にて元服せられける時、よまれける歌、

久方の月のかつらもをるバかり家の風をもふかせてしがな

とて、拾遺集に入りて、今も人々のもてはやせる歌なり、この伴氏の事は、さはだちて、世に傳はれるふしとてはなけれども、道眞公のおひたちより、人とならせ給へる、さては身を國家の爲に犧とし給ひつる事など考ふれバ、もとより道眞公の天性學識の、然らしむるにもよるべけれども、またこの母君の、素養ありて、深く眞

事に心とめつゝ、養育し給ひたる結果といはざるべからず、この畧傳の第一にもいへるが如く、悖徳の者は、附言をそへて、云々すべき本主意にもあれば、伴氏の如き、他に著き事傳へたるものなきにも拘らず、おのが推量を以て、特にこゝに擧げつる也、さて伴氏は、貞觀十四年正月、菅公の廿八にておはしゝ年、みまかられき、(年代の順序にていはゞ、この伴氏の傳は、前に入るべかりしを、誤りてこゝに入れつる也、)

右近

右近は、交野少將の女なり、父の名は季縄、右近少將にてありければ、右近と呼びなせるなり、右近は、七條の后穏子に宮仕へして、才學を以て稱せられき、この穏子と申し奉るは、朱雀村上二代の國母にわたらせられしかば、勢もうに、いとやんごとなく、從ひて宮仕への者も、いと榮えたりきといへり、右近和歌に巧に代々の勅撰にいりし歌も、いと多くあり、かの百人一首に入りたる、「わすらるゝ身をバ思はず」の歌は、殊に今の世にも稱せられて、いとめでたし、然れども、大和物語によるに、右近宮仕への折、權中納言某といへる人と、いと二なくかたらひ、彼の男、忘

れじと、よろづの事をかけて誓ひけれど、後遂に忘れたりければ、いひやりける趣よて、この忘らるゝの歌をのせたり、拾遺集に、題志らずとある、その事實を、大和物語にいへるなるべし、右近のその他の事は、傳へたるものなければ知りがたし、

紀内侍

紀貫之の女にて、宮仕へして、内侍となりしを以て、紀内侍とよべるなり、内侍、和歌におきては、父の女たるよ耻ぢず、この内侍の著にて、人々、紀氏六帖とてもてはやせるにても知るべし、この内侍は、鶯宿梅の歌よみたる者とて、いと名高ければ、大鏡によりて、その事實を左に畧記すべし、

天暦村上天皇の時、清涼殿の御前の梅の木、枯れたりければ、易へ植うべき梅を、諸所く尋ねさせられしに、西の京に、色こく咲きにはへる木一本ありけり、さてそを掘りとらせられしに、その家の女主、此を梅の木に結びつけて進られよと、紙にかきたるものいだしければ、いふがまゝに結びつけて進りぬ、天皇そを御覧ずれば、女の手にていとうるはしく、

勅あればいともかしこし鶯の。やどはととはゞいかゞこたへん

とぞ書きたりける、あやしく思し召して、何者の家ぞと尋ねしめられければ、紀貫之の女のすむ所なりと申し上げぬ、天皇それを聞きて、かの梅の木をかへし遣し給へりとぞ、

かゝるめでたき婦人にてありき、

（以下次出）

日本文典（承前）

杉谷正隆

第一、作用詞より變じて、名詞となれるものは、かすみ霞、けぶり烟、もみぢ紅葉、こひ戀、等なり、此は皆作用詞にて、かすま、かすみ、かすむ、かすめ霞、けぶら、けぶり、けぶる、けぶれ烟、もみぢ、もみづ、もみづる、もみづれ紅葉と、語尾の變化すれども、用ゐかたによりては、名詞となるなり、例へば、空のかすみ、夕のけぶり、峯のもみぢなどの如し、

第二、形容詞より變じて、名詞となれるものは、はやく早、おほく多等なり、此は皆形容詞にて、はやく、はやし、はやき、はやけれ早、おほく、おほし、おほき、おほけれ多と、語尾の變化すれども、用ゐかたによりて、名詞となるなり、例へば、

はやくのこと、おほくの人などの如し、

第三、作用詞、形容詞の語尾省かりて、名詞となれるものは、うた歌、よど淀、かなし悲、こひし戀等なり、此は皆、うたは、うたひ、うたふ、うたへ歌、よどま、よどみ、よどむ、よどめ淀、以上作用詞 かなしく、かなし「、」、但右の二つ重なる時は、下の右を書きて、たゞ「かなし」と云ふ、かなしき、かなしけれ悲、こひしく、こひし「、」、此も「かなし」と同じく、右をはぶき、「こひし」と云ふ、こひしき、こひしけれ戀、以上形容詞 と、語尾のあれども、其の語尾はぶかりて、名詞となるなり、例へば、うたのことば、かはのよど、かなしのよ、こひしの人などの如し、

第四、名詞と名詞とかさなりて、一つの名詞となれるものは、やまがは山川、はるがすみ春霞等なり、此の時は、大かた、下の詞の始の音を濁るなり、若し清みて云ふときは、二のものになりて、山と川、春と霞とのことになるなり、然れども、中には、清みて云ふもあり、はるはな春花、はるかせ春風などの如し、又、上の詞の末の音を變じて云ふことあり、例へば、ふねひと舟人、かせかみ風上、さけつぼ酒壺と云ふべきを、ふなびと、かざかみ、さかつぼなど云ふが如し、上の語尾を省くもあり、例へば、ふみばこ文箱、ふみて文手と云ふべきを、みを省きて、ふばこ、ふで

など云ふが如し、

第五　名詞と作用詞とかさなりて、一つの名詞となれるものは、あさおき朝起、ひるね晝寢等なり、又作用詞と名詞とかさなることあり、こひゞと戀人、まつりごと祭事、いはひごと祝事等なり、

又名詞には、他の名詞、或は作用詞の上にありて、尊稱、美稱、助勢等をあらはすものあり、美稱をあらはすものは、みす御簾、とよさかのぼる豐榮登、たまだすき玉襷などの、み、とよ、たまの如し、尊稱をあらはすものは、例へば、おほぎみ大君、たかみくら高御座などの、おほ、たかみのごとし、助勢をあらはすものは、うちわらふうち笑、さしかへるさし歸、かきはらふかき掃などの、うち、さし、かきの如し、

漫録

設兒後の婦人

霧の舍主人

學校に通ひて、物學びに暇なく、家にありて、手藝に他念なき諸孃には、今まのあたりの事にはあらねど、年積み時來らバ、一度は男の傍に、いはけなき兒子を愛し給ふ時ありぬべし、さてその兒子を擧ぐるといふ一事は、實に婦人の上に、變化を來すべき一區域の境目なれど、大に心留むべきものあり、倘いひふかむれバ、兒子を擧げたる婦人と、兒子を擧ぐる以前の婦人とは、同一の人にて、しかもその性行擧止に至りて、前後甚しき差異を生ずれど、大に注意すべき事ぞといへるなり、されど今この事に就きて、聊述ぶる所あらんとするも、諸孃の爲に、無益なることにはあらじ、まして既に婚嫁を經給ひたる婦人には、まのあたり心に當りて、幾分かの藥汁となりなまし、おのれ年久しく、この事に思ひ當りたる事もあれバ、左に項目を次でゝ、順次に述べつぐべし

婦人が既に婚嫁を畢へて、最も心に介意する所のものは、舅姑良人に嫌厭せられて、一朝離別の苦境に陷らんかといふ事是なり、離別は、實に婦人の終生の耻辱にて、一度この苦境に陷りたるものは、恰も、婦人社會より驅逐せられたると同一の感あるものなり、故に婚嫁を畢へたる婦人は、その當初、この耻辱を避けんと務むる情狀、誠に一種憐むべき情あり、是の時に當りて、從順と、勤勉と、謹愼と、凡て同一に行はれて、概畧婦人の欠點を見ること稀なり、然るを、一朝兒子

を擧げ設けんか、曩に介意憂慮せし離別の恥辱を思ふ情念、次第に減殺して、玆に性行擧止に一變動を生ずる也、けだし婦人の兒子あるとなきとは、一大關係を持つものにして、七去の內、既に子なきといへる目なとあるが如く、婦人の一大重荷といふべし、この一大重荷を卸す時は、他に過失なければ、去らるゝ理由もなく、又よし過失ありたりとするも、擧げ設けたる兒子は、舅姑良人の愛念を繫ぎ留むべき鐵鎖となりて、婦人の爲には、かの恥辱を防ぐに、金城湯池よりも、堅牢のものとあるなり、既に離別の恥辱を防ぐに足るべき堅牢のもの出來たりとすれば、曩に介意憂慮せしものは、忽ち安心と變じ來るも、勢止むことを得ざるべし、憂慮の安心と變ずる、實に婦人の爲に賀すべし、然れども、その安心に伴ひて生出する結果如何を察すれば、又大に誡むべきものあり、今試に、安心の爲に出で來る弊害を次第すれば、凡左の項目の如くなるべし、

第一　粧飾は過半廢止するに至る事、

第二　動止に注意せざるに至る事、

第三　舅姑良人の奉侍に不敬怠慢を生ずる事、

第四　他人に應接するに禮を欠く事、

第五　灑掃拂拭の勤勞を欠く事、

第六　婢僕を使ふに驕傲になる事、

第七　早臥遲起の風を生ずる事、

第八　萬事兒子を口實にして責を免れんとする事、

この他にも猶あるべけれども、以上八項の内に含めてありなん、この八の項目ぞ、今おのが次々に云はんと欲するところのものなる、

（以下次出）

縣居遺文（つゞき）　榴の舍校註

五月五日によめる

人毎にあやめのかつらかけつゝも
　ことぶく今日のいつか來つらん

あやめのかつらと云ふは、さまぐ＼にくみかざりて、人の髮などにかけ、又すだれ几帳にもゆひつけ侍る。軒にふくことは、後の事なれど、かく引直してまゐらすめり。

又同日のある時の歌

長き根をためしに引きてけふ每に
　あやめのまくら幾代かさねん

あやめを枕にゆふは、五日の夜の事なり。しかれば、五日のことぶきには、よみたまふことといかゞ。

長き根をためしに引きてあやめ草
　幾よろづ代かけふをかさねん

かくあらんか。

あした

これは、逢ひての明くる日のあしたの心なり。後朝といふ戀の題に同じ。へだてに、是も古今六帖にある題なり。あふて一夜をへだてゝ、いまだあはぬこゝろをよむなり。

しら露のおきわかれては君をのみ

けぬべきほどに物おもふとは

とはとよみては、上へかへるてにをはなり。然れど、上を、君やしるなどやうにいひきるべし。上下きれたる處なくては、下よりかへるべきところなし。されど、この歌はしからで、其心深く思ふよしのすがたになるべきさまなれば、

しら露のおき別れてはけさのまも
あへずけぬべき物としぞ思ふ

かくあるべきにや。

楢の舍いふ、あへずはたへぬ義なれど、今は耳遠き詞なるべければ、用意してよむべきなり。

紙繪のさなへとるかたのある所に

紙繪は、かみに書きたる繪なり。うゝるかたは、植ゑし繪の事なり。其繪のかたへに、歌よみてかきつくるなれど、早苗うゝるは見る〳〵よめど、同じくは、それよりうへの事をよみたるがよく候。されど、しは早苗につきたる意ならではわろし。

長歌引直し

あし引の、山ならねども、うちはれて、心もそらに、何しかも、思ふことなく、思ふどち、風を涼しみ、つどひつゝ、はしゐし居れば、かぎりなく、夜の心は、するがなる、をちにぞ見ゆる、ふじのねに、かゝれる雲の、白たへの、雪の常よも、消えやらぬ、色とし見れど、さながらに、われさへもまた、時しらぬ、夏なきものと、おもひけるかな、

引直し、

あし引の、山ならねども、のぼりたち、四方をし

見つゝ、み空ふく、風をもいれて、日ぐらしに、思ふこともなく、思ふどち、物音あそび、欄干に、より居てうたふ、聲々も、空にぞかよふ、そら遠き、ふじのたかねの、しら雪を、さやかに見れば、さながらに、われさへ夏の、時もしられず、

趣向、いとおもしろく候へども、詞のつゞきを直してまゐらすなり。又、一句〳〵の間を、わけて書きたまへるはわろし。引きつゞけて書きたまへ、懐紙は、大かた一枚にてよく候べし。もし一枚にては、いとせまく候はゞ、紙をつぎてかきたまふも、くるしからず候へども、こまかに書きたまはむ、一枚にて足り候べくなん。かさねは、夏の重、何にてもよく候べし。もし又料紙のよこの長く候はゞ、よこを、紙のありたけに長くておきたまへ。上下のたけは、あまり長きは見ぐるし。夏の重は、卯花、表白裏萠黄。たち花、表黄裏萠黄。杜若、表紫裏萠、花柳、表黄裏萠。撫子、表紅裏萠。この外もあり。

戊申いふ、古風の長歌は、五七五七と詞をつゞけたり、今様の長歌は、七五七五と詞つゞきて、いといやしきさまに聞ゆる事なり。

右長歌の返歌

ゆふべはわきて風もすゞしき
夏ぞとはおぼつかなしや高どのに

一二の句の、心よろしく候を、短句いひつめられて、わろく候なり。下を皆すてゝ、右の一二の句の心を、いひのべられん事なり。そは、

忘れては夏てふことをなかなかに
おぼつかなくも思はゆるかな

萩

風吹ばすみすてにけるふるさとに
はなさく萩やひとりそよがん

萩には、風の音をよみ候はず。よて五句を引直し侍り。

はなさく萩やつゆてばるらん

月前雁

あきかせの夜寒のそらにすむ月に
かずさへ見ゆる雁のひとつら

古歌をとりてよむには、句のおり所をかへてよみたまふがよし。同じ其詞を取りて、意は、本歌の如くならぬやうに、はべり度く候、古歌は、詞をとりて心をばとるまじきに候へば、いかゞに候。しかし、四季の歌などを、戀歌にとりたるぞよく候。古今集に、しらくもにはね打かはしとぶ雁の
數さへ見ゆる秋の夜のつき、

名所萩

すむ月のかげをやどして宮城野の
小萩がつゆぞひかりみかける

ことわりは聞え侍れど、かくては、みやぎ野のよせすくなく候まゝ、名所さだかならず聞え候、同じくは、月なくて日のうちの氣色にて然るべく候。月などは、おもきものに候へば、其方へひかるゝなり。されど、このまゝにていはゞ、

すむ月のかげやすかれむ宮城野の
小萩がつゆぞよほひことなる

かくも候はんか。此題は、其よせ殊更ならんぞ、よく覺え候。

（つゞく）

おもひくさ（つゞき）

藤井行麿

○盃出だして、のみかはすをりなどは、論なう、けおされにたるやうなれど、めぐりくるも、まどほき隙には、猶しも、はた、ゐわらぬぞかし、下戸は、さらなりや、かの忘れおきて、いなんとしたりしものよ、をり〳〵の心ばへ、時につけつゝ、しいつるたくみ、年々月々に、珍らしう、しらがへば、いたりすくなき、わか人などは、いとこのましうしつゝ、ふりぬさきにと、いそぎもとめて、ほこらしげに、ありくを、人もはやう、もとめたるこそ、くちをしけれ、大かた、かやうの事、人に爭ひ、うけばりたるころ、いとをさなきわざならめ、人のめでたしと、乞ひて見るだに、したり顔したるは憎し、又あまりきすくにて、いつも、ふるめかしきかたをのみ、まもり居たるも、折よふれ、所によりては、さはいへど、はえなき業なり、たゞ、何となく、おいらかに、なつかしう、きよげなるを、あるにまかせて、もたまはし、女などは、さもあらめど、をこがましくも見ゆるぞかし、かうやうの、すき〴〵しさも、若きはせは、罪ゆるしつべし、さだ過ぎたる人の、ようせずは、うま子も、いだきつべき、ころはひなるが、今めき、はなやくこそ、あいなきものなれ、

○いふかひなく、年まかりより侍りては、何事に

つけても、おのづから、人に心をれざるから、ひが〳〵しきこゝろも、出でくるわざに侍れ、おのづから、陋せきものになりゆき、うたての翁よと、うちわばめられ、まじらひ ふればふ人も、ありがたき世にこそ、など語りつゝ、きせる のごひ、みがきなどしつゝ、のみゐるは、若かりしより、たがひに、こゝろかはらぬ友ならめど見つゝ、こころぐるしく、聞きゐるわかう人さへ、ゐあらず、ましして、ひとり〳〵に、わかし暮らすらん老人の身を、さらぬ友としたるは、ことわりにこそ、相思ふと、もろこし人の名つけゝむも、げにさることぞかし、

○世はなれ、ものすごきみ山のおくにも、すめば、とし月をかさねて、すむものは、花紅葉、うつればかはる、をりふしのさびしさを、いかゞはせん、秋の夕霧に、しほるゝ槙の下露をながめ、夜ふかく、松の實の、ほろ〳〵とおつるを、ねられぬ耳に、聞き居たらんほどなどのつれ〴〵は、金爐烟靄の、すこしきなるにのみぞ、なぐさめてまし、

○何となく、はかなげに、およびにすゑて、めぐらし居たるも、さびしげに見ゆ、あはれ、源氏の君の、須磨の御うつろひのほど、御つれ〴〵なりし世に、かゝるもの、ありてましかばとおぼゆ、

○はなやかに、今やう謡ひ、いとなつかしう、ひきすましたるものゝ音に、聞きゐる人も、おのづから、時々聲うちそへ、かたはし、つゞしりうたひつゝ、きようじたる、きゝしらぬあたりも、きせるして、しどけなく、ひやうしとりゐたる、さ

うく〵しからぬわざなりや、

○二夜三夜、よがれしとこの、うらみもち、りも、また、つもるとはなけれど、大ぬさの、ひくてや餘所になど、かこちつゝ、くることとの葉を、あはれときゝつゝ、つひのよるせを、かたらひなぐさめなどしつゝ、かたみに、ぬらす袖の浦にも、たく藻のけぶり、たつとなむ、枕より外に、もらさぬむつがたりも、此人は聞きわかすらむ、鐘の音も、曉近く、告げわたせど、つきぬ契りは、猶、有明のつれなき空に、とゞめおきて、立ちわかれんとするほど、つま戸おしあけつゝ、ながめ出だして、とみにも出でやらず、あしたの露のと、打ちずんじ、衣うちき、はをり紐さしなどするほど、女も、猶あかぬさまにて、海士のもしほ火、またたきそめ、およびして、けしきばかり、かいのごひ、こゝろありげに、さしよせたる、にくからで、とりつゝ、吹き出づるけぶりに、入方の月かげ、さとくもりたるは、いひ知らず、あはれに、えむなり、明けかたのけしきなりとかや、又人目をつゝみ、色に出でゝ、わりなき戀をするがなる、ふじの烟の、くゆりわび、空にきえなん、おもひのほどをも、かゝる便りに、人つてならで、さながら、ほのめかしいづるわざも、ありとかや、

○女は、大かた、すかざらむが、まさりてぞ見ゆる、なよびよしめくかたには、たよりとも、なりぬべけれど、さるから、いとゞおも憎きかたもそふかし、されど、今は、おしなべての事に、なりぬれば、もちひざるは、中〳〵さうく〵し、

○二つ三つばかりなるちごの、見ならひて、ちひさき手さしのべ、まさぐりつゝ、口にさし入れたる、あやふしとて、とらむとするを、むつかりすまひたる、いとうつくし、

○鼻より、ふと、けぶりの立ち出でたるを、炭竈のやうに、おぼえしといひし、さは、其人の顔や、雪のやうにありけむと、いとゆかし、

○輪にせむとて、人の吹出でたるけぶりの、をかしくまどかにて、いくつもつらなりあがるを、我も、なじかはあやまたん、いとようしてむ、見給へなど、あらがひつゝ、吹出だしたるに、あやしう乱れぬる、こゝろうがりて、此たびは、いかでと、いたく口つきつくろひ、こゝろしたるが、又吹きそこなひたる、いとむとくなり、これをや、けぶりくらべといふべからん、

○我けぶりに、人のむせびて、顔あかめ、しはぶき、頻にしきたる、いと苦し、

○捨てたるに、猶立ちのぼるけぶりは、みあ人のいとふ業なり、

○やにといふものゝ、口に入りきて、ひたひに皺よせたるもをかし、ゑひて、かしらいたくしたるも、またをかし、

○おもふどち二三人、類して、北野へまうでけるに、いつも、人おほく参りたるよ、まして、廿五日などは、おまへわたり、所せく、たちこみて、近づくべくもあらぬに、からうじて、御階をのぼり、からうむのほとり、かたはらより、をがみ奉る、こゝらの人、おのがさまぐ、何事をかいのるら

ん、いと久しく、ふしをがみ、ぬかづき居たるもあり、かれだみたる聲して、なにがし、そくさいの爲など、けいするも、ほのきこゆ、こと〴〵しき、かしは手のひゞきには、あらひと神の、かしこき御耳をも、驚かし奉るらんと、いとたのもし、手さしのべ、十二とうの心ざしとて奉りたる、敬白のかた、うちならすも、いとなく聞ゆ、おくの方を見いれたれバ、御札卷數など、宮僧バらの、とり出で丶さづくる、いたゞきて、まかづるもあり、すこし、こなたざまには、打ちさうぞきて、はらひも何も、しのびやかに、よみ居たる、法師は、だらになど、ゆるらかに、ねむずるもたふとし、みあかしの、うしろの方より、いろがはしげに、めぐりきて、みはしのもとにて、かたバかりをがみつ丶、また走りゆくは、も丶たびまうでとかや、さるは、手に珠數さしゆくも、中には見ゆ、南の御門を出で丶、あそこ丶、物見ありき、下ざまへゆくに、寺なども、多く並び立てる前を過ぐるに、かたはらより、やせさらぼひて、いみじきさましたる、かたゐの、つとより、あが君〴〵、たバこすこしといひたるぞ、いとこちたき、いひをだに、思ふさまには、くはざんめるもの丶、これを、しか、あながちに、こふことぞ、よにあやしき、かへりも見でゆくに、猶けしきとりつ丶、か丶づらひくるを、うしろより、ずさのせいする、き丶もいれず、すこしえさせたるに、二なうよろこびて、いぬるぞあはれなるや、

道ばたの記

楢の舍主人

○人の往來も少からぬところに、貸家又は賣家など貼りつけたる、見苦しとも、見苦し。あき家かと見れば、中には住む人もまだあるなるものを、家主の心ざまのあしきためか。はた、借りての意氣地なき故か。吉田兼好は、家造にてあるじの人がら測り知らるゝ由記せり。法師もし今生に出でて、貼札せるに住む人あるを見ば、如何にいひ甲斐なしとつま彈きせん。おのれの如き、かまはぬ男にてすら、氣にかゝるものを。

○黄八丈めきたる色の羽織、長々と着てなして、應揚に歩み來るは、何の怪物ならんと、まばゆきに目もうばはれて、そなたのみ、きと見つむれば怪物にてもあらず。うまれは同じわが姉妹なりけり。あはれや、何のふるまひ。優美なる、なつかしき、ほれ〴〵しき興もさめ果てけるよ。五貫目ばかりも、綿入れつらん。されど、その心は燈しんよりも輕やかなりといへば、色町に住まぬといふのみにて、あだめきたる心は、關守も無かるべきにや。折らば落ちぬべき萩の上の露、拾はゞ消えなん玉ざゝの上の霰などの形容にては、あまり上﨟めきて、不似合なるべし。書生羽織こそ、見ぐるしきものゝ限なりけれ。

○雜誌屋のにぎはしきは、小川町神保町。花やかなる隅田川のけしき、都名所をとり〴〵にかけ並べたる中に、一きは目だちて見ゆるは、元祿以後の風俗うつしたる、歌川派の筆つきなるべし。う

す墨のにほひ、顔つきのあざやかさ、荒くれ男も心やはらぴ、老も若も眸こらして、穴のあかんバかり見つめたる、非人どもの、札所まはりて施行にあひたらんが如し。袖のひま、肩のほどより、恥かしきやうにさしのぞけるは、何處の少女ぞもぞ。五郎のいでだちも、うるはし。十郎もよし〱。あゝ、それよ、九郎判官の似顔は、誰のよりもといひさしたるは、そも何事と、わけ知らぬ道者の、耳ふり立て、きこしめすも、恐し。役者の品定は、やんごとなき人の令嬢に多しと、うはさする今の世の中、如何にみだりがはしきにか。おのれ親しく見しこともあれど、千石の憾を呑みても、この穴さがしバかりは、まづ御免を蒙るべし。探訪にぬけ目なき、讀賣新聞を桂川として、うき名

を流す方々の、日にまし數おほくなるは、なげかはしともにくらしとも、何とてかほどまで、淫風の吹きまはすならん。おのれかつて、天暦一條のころを、風俗のみだれたる頂上と思ひしことありしが、諺に遠きためしにもあらざりけりな。雜誌の數の、日を追うてふゑ行くに、ねうちのあるやうなるが見あたらぬは、たとへバ、川原の眞砂を店さきにふりまきたらんが如し。國文といふ優美の看板のもとには、快活なる空氣すます。奈良朝平安朝ごろのを、鑵詰にして賣捌くより外に、おのれらの口にあひたるは、一つもなし。それは何故。世の人々も、心づきたることもあるべからんが、おのれは別に急所を見やぶりたり。いでやその由、片はしなりともあげつらはんか。否々、ま

だ充分取調すみたるにあらず。毛を吹いて疵とやらん諺に陷らんは、わが好むところにあらず。今年暮れ、來春となりなば、取纏めて報告することともあるべし。嬢よ〳〵、今の國文を完全無缺とおぼしたまへ、わが所見の出づるまでは。

筆のついで（二）

昨非生

蓮月と式部の品さだめ

むかし京都に、高畠式部といへる婦人あり、初千種殿に仕へたりけるが、よく歌を詠み、音樂をも能くしたり、大極意うけたりといふは、實なるべし、さて家には、常に樂器をそろへて備へたり、されば、蓮月と式部と一對の優たれども、いかなる故にか、世の人、蓮月をのみ、殊勝なるものとし、式部をば、とかくにあざみわらひて、賞むる者なかりき、或は云ふ、式部は、むかしの和泉式部の類にて、この式部は、ねずみ式部にこそなど、口さがなくも誹られき、いかなれば、かくはと尋ぬるに、人、蓮月に逢ひて、式部が事を問へば、彼の式部は、歌をよく詠み、音樂の道にさへすぐれたり、必訪ひ給へかしと答へたり、さて、式部に逢へる人、蓮月の事をとへば、かにかくに、口きたなく誹るから、きくさへうたてかりき、蓮月と式部とは、たゞ、この一事の差あるのみにて、蓮月は、いよ〳〵名高くなりて、式部はます〳〵品おつることゝはなりぬ、

返歌なきぞなか〳〵よき

今はむかし、紀伊の國なる人、有職を學ばんと、年頃京都にありける程に、ある女と、かたみに志ふかくなりて、東山の松のみどりに、かはらぬ色を契り、賀茂川の流に、絶えせぬ行末をかけて誓ひしも、男やう〱事果てゝ、故郷の紀伊の國に歸りけるに、女をば京都にとゞめいにけり、さるからに、戀しさに絶えざりけん、女

ねるまだにみださじと思ふ黒髪を
　けづらぬまでになりにけるかな

と詠みて、男の方へおこせたりけり、返歌はいかがありけん、きかざれど、名歌に返歌なしとかや、なきぞ、なか〱に、おかしかるべき、この事、男の主たる殿のきこしめして、さばかりのよき歌よまん女を、何かくるしかるべきなど、賞めはのめかし給ひければ、男、遂に國にゐて行きけりとなん、其の後男におくれて、この頃まで京都にありと云ふはまことよや、この男は京都にて、何とか云ふ歌集など撰みし人なりときゝしが、今は、人の名も、書の名もわすれにけり、

歌に服して神道を修む

むかし、山崎闇齋といひし人あり、某氏の神道を講ずるをきゝ、これを笑ひしかば、某氏は、歌一首を詠みて、闇齋があざけりを解きけり、

あしからばわが親とてもすてなまし
　おのがやまとの道なそしりぞ

この歌の意は、たとひ、父母に過失ありとも、委棄すべからざるは、正大の理なり、今日本國に生れて、みだりに神道を誹謗するも、亦父母を委棄

するものと同じとなり、闇齋これをきゝ、大に心服し、更に齋を撤げて、其の敎をうけしと云ふ、

いさめのすさび　子供敎草 心學拔萃

井上頼文寄送

民を憐む君は、日月の如し、
忠義は、末代出世の手本、
親孝行は、我子孫の爲め、
眞は、寳のあつまる所、
不忠不孝ある者は、人面の獸、
自慢は、智恵の行當り、
家業烈しきは、賑ひの基、
讀書は、よき道の案内者、
信心は、眞のこゝろをあらはす、
問吊ひは、其家長久の證據、
非道の金持は、三子に花を持すが如し、
奢ものゝ末は、世上の厄介、
無慈悲の吝ぼうは、寳の番人、
手習は、通用の眼の療治、
堪忍のならぬは、心の掃除の足ぬ故、
短氣は、身を亡す腹切り刀、
堪忍は、其身長久の基、
家内喧嘩は、貧乏の種蒔、
喧嘩口論は、後悔の手本、
後悔は、前方の不案内、
ありの儘は、正直の看板、
始末は、冥加を恐る人、
辛抱は、物事成就の元手、

大酒遊藝は、末の身知らず、
博奕は、毒を知て毒を呑が如し、
かすり取は、刀の樣し物、
惡人は、罪咎の掃溜、
善人は、五常の鏡、

官醫曲直瀨氏養生歌三首

あ、ま

こゝろをバつかふ事なく休めおき
　身をバひまなくつかふべき也

養生はうゝることとなくわかずして
　ものおもはざる外はあらじな

いたき針にがきくすりにあつき灸
　苦しまんよりかねてつゝしめ

安永八年版 婦女髮樣（承前）

井上頼文寄贈



すきあげ髪に　こたひつけ

はぶたへびん　に　せきれいつと　ひやうごわげ



くるまびん　に　ばいわげ



こぼれ梅

渡部乙羽

其四

土一升に金一升を篩にかけて徹せしやら、万家の瓦は砂子を撒きしに異ならず、草より出でゝ草より入りし、月は昔時の月影ながら、變り果たる武藏野の腹鼓打つ狸の名は、色里にのみ微に殘りて、簑輪の田甫に蛙の聲を漸と聞く、こゝ大江戸の賑はひは、またと類ひはあらざるべし、

別けて兩國橋の繁昌は、二六時中に一筋の鎗絕ゑたることなく、往ふさ來るさの人の足は、水ならねども波を打て、空に埃の雲を靡かせ、觀世物小屋の太鼓の音は、雨ならざるに百雷の響を起す、少し距てゝこの雜沓を知らず顏なる、本所二ツ目の橋通りは、お屋敷の長屋檐を並べて、物見格子に御次男が、通る女性の品評め續く土塀に樂書の、相合傘の戀知りか、見かけで云へバ嚴格しき、五十餘りの老人が、未だ年若な娘をいたはり、急ぞ〳〵歩む行先は、吉良の屋敷を折曲りて、松井

町なる煙草屋へ入りぬ。
老人は店の閾に腰うちかけ、十次郎殿よく御精が出來ますな、拙者は今日しも小春の空には珍らしい上天氣ゆゑ、娘を連れて墓參と出かけました、貴殿は、お年もお若いのに、なか〳〵御奮發なさるゝ事ぢや、時に少と折入つて話したき一大事がある、一寸勝手へ參つてお耳を拝借いたさうといへば、主人は刻みかけし煙草の手を休め。ナニ一大事とな、山科より音信でもありましたか。シツ聲が高いワ、靜に去なさい、壁に耳あり、障子にも目がある世の中ぢや、謀計は密なるがよいとあれば、此處は端近にて他目がある、奥へ〳〵と語り合ひつゝ、娘を店にとり殘して、二人は一室へ入りにけり。
頓て老人は主人へ斯くと耳打すれば、聞き了りて莞爾と笑ひ、俄に丁と小膝を叩きて。大石殿出來されたり、小人は酒色を以て誑かさゞれば、其隙に乘ずるの機無し、今や吉良上野之介、年頃の警衛に倦みて、漸う準備を疎略になし、剩へ好色の白痴とて、酒に溺れ本心を搔き亂して、美目好き侍女を召抱ふる由風聞す、その噂若し眞ならば、早く我方より手を廻して、御息女お松どのを屋敷へ住み込ませ、討入の





夜の案内などなさしめ給へ、遲れなば他人の足跡や踏まん、さりながら最愛のお娘御を人質同樣になさるゝこと、何程か御心苦しかるべし、またお松どのが胸の中の切無きこと、餘所ながらお察し申すと、涙を隱して云ひ出れば、老人は頭をうち掉り。いや〳〵左樣は仰せられな、御身とても拙者とても、主家沒落の其折から、一命は遲かれ早かれ無きものと覺悟の前、娘とてもその通り、御臺樣に册き奉りては、松よ〳〵と御慈悲を下し賜はりし御恩報じに、御主の爲めになることなら、たとへ此身を粉にしてもと、親ながら氣味の好い程潔き決心を、大石殿に云ひ遣れど、そんなら直に傳手を求め、吉良の屋敷へ入込みて、始終の樣子を注進せよ、若し謀畧成就せば、四十七騎の一人にも増したる程の忠義なりと、事を分けてのお勸めに、親子共々喜びて、この嬉しさを御身にも知らさうものと、態わざ參つた、十次郎どの喜んで呉れ、足はぬ娘が親に優りし忠義を立てるかと、思へど何うやら鼻が高い、が、たッた一つ悲しいは、許嫁ある御身と娘と、祝言の盃もさせずして、王照君が胡關の恨み、見す〳〵敵の邸內へ、離さにやならぬ武士の意氣地、あァ二本差は味氣無い身の上ぢやな、われ〳〵店に居る娘の姿を御覽じろ、未だ十八の蕾の花、雨

にもあてず嵐にも、吹かせずこれまで育てたる、親の苦勞は並大抵ぢや御座んせぬぞ。しかも十五の春の暮、お屋敷なる奥庭の、櫻も今を盛りぞと咲き揃ひたる折からとて、御臺樣には和歌の筵を開かせられ、御奉公申上ぐる女中衆も、數多自詠を參らせけるに、娘の歌はその中での秀逸とて、身に餘りたる御賞辭、其上御身と娶合せんと、勿体ない御臺樣の御媒妁、貝合せ好い一對の夫婦ぢやと、羨まるゝ程肩身が廣くて、今日か明日かと祝言の御沙汰のみ待ち居りしに、御家騷動ありてより、花に嵐は物憂き事の始めとなり、對の扇は離れ〴〵て、何處の風を便るやら、明日からの娘の身が不愍ぢや、えゝこの別れ氣骨が折れて、宗右衛門年の五つも老つた樣なと、流石の勇士も恩愛の絆に愚痴を溢しけり。十次郎は默然として俯向きし顔を擡げ。先刻より段々の御語し、御心切あり難う存じまする、殊に御親子の御間柄、その御嘆きもさることながら、武士の妻マツタ娘にして、敵の陣中に擒となり、忠孝二つを全うせしもの、和漢古今に其例あれど、御嘆きは御無用たるべし、拙者には未だ許嫁のみの妻なれど、夫婦共々君に忠義を立るのは、身後の名譽この上やあるべき、さるをなどて悲しみ申さん、鶴龜〳〵と勇み立てば、老人原宗右衛門も今の

一語に勵まされ。おう勇ましや聟殿、御身にさへ御異存無くば、我等親子の如何で躊躇いたすべき、娘來よ〳〵、十次郎どのより許が出でしぞ、こゝへ來て禮を云やれと呼び立つれど、娘は半ば羞らひつゝ、暖簾をくゞり父の傍、袴の裾に纏綿りて、聲だに立てず辭儀する樣、身丈伸びても小兒氣の、愛度無き風の衣はらしさ、晴れの小袖に晴れやらぬ、雲もあるかや裙摸樣、曙染にぼかせるは、娘が顏のホンノリと、これ一對の色合なるべし。

折から店へちらと來て、賴みませうと音信ふは、ツイ聞き馴れぬ女性の聲なり。

文林

曉旅行　近衛　忠熙

さしぐしのあかつき深く立出づる
旅のころもぞつゆけかりける　徳大寺實則

とりのねに驚かされてたちしかど
まだ明けやらぬさよのなか山　東久世通禧

あまりにもけふの門出や急ぎけん

行けども暗きのぢのまつはら
佐々木高行

夜をこめて麓をたてばはこねやま
たかねよりこそ明初めにけれ
鍋島直大

うらみたるものとしもなしたび館
待つあかつきのとりの八聲は
前田利嗣

あかつきの鳥の八聲にたちいでゝ
野こえ山こえゆくたびぢかな
黑田清綱

袈裟女

身をすてゝたてしみさをに黑髮の
みだれぬ筋はあらはれにけり
高崎正風

曉旅行

嬉しくもうまやはづれの松ばらに
かゝるをりしも夜はあけに鳬
前田利鬯

足曳のやまぢをけふはこゑんとて
あかつき深くいでにけるかな
黑川眞頼

ふみて來しなみ木の松の影きえて
月はありあけになりにける哉
小出粲

一杯のかど出のさけもさめはてゝ
あかつき寒きたびごろもかな
坂正臣

玉くしげあくるもまたで立立でぬ
みやこに早くつかまほしさに

植松　有經

ゆけど〳〵並木の松のかげくらし
宿をたちしや夜なかなりけん
谷　勤

たうげにて初めて人にあひにけり
余りにはやく立ちしけさかな
内藤　存守

朝いするわれさへ旅はいそがれて
つきの影ふむあけがたのそら
松浦　辰男

綾瀬靜帆

朝ぼらけのぼる綾瀬のかた帆ぶね
こゝろの乘らぬ人やなからん
大口　鯛二

猫

ひざの上になれて眠れる猫みれど

鼠とりくふけものともなし
藤井　行麿

菖蒲輿

きのふまでいつかといひし菖蒲輿
今日ぞくもゐの庭にかをれる
片岡　正占

文

ふみよめと敎へぬ師やなかるらん
學ばぬ子なき世となりにけり
光岡　正彰

橘太后

さきそめてさかりひさしき九重に
千年もにはふたちばなのはな
三浦　千春

山部赤人

類なく世にたかき名をふじのねの
ゆきの上にもたてしきみかな
井上　賴文

田家首夏

きのふかも花見にきてし小山田の
菴はくはふのかげとなりぬる

瀧長僧の妻　佐々豐水

岩がねをたぎりておつる水よりも
いさぎよき名ぞ世に流れける

峯雲　小澤幸民

はるゝかと見れむかゝれる向峯の
雲ぞこの世のすがたなりける

曉旅行　鍋島榮子

あかつきをまちかねてゆく旅路哉
今日はみやこの山やみゆると

前田朗子

鳥のねにおどろかされて草まくら
まだきに宿をいでゝけるかな

國府津のやどりにて折々よめる　何多仁子

よそめには危けれどもあらいその
波をこゝろにかけぬふなびと

おきつ波たちなさわぎそ旅ごろも
きなれぬ宿はさびしかりけり

曉旅行　小池道子

夜立して憩はまほしくなりぬれど
あさ戸あけたる家なかりけり

松平健子

さしぐしのあかつき月夜空にみて
知らぬ野山をゆくたびぢかな

鶴久子

ぬば玉の夜はまだあけず余りにも

急ぎてやどをたちてきぬれバ

中島　歌子

とりがねに驚かされていでしかど
まだ道のへにつきはさやけし

狂詠洋酔女歌并短歌

和魂固老

くびはその腰太をとめ　面瘦せて目くば鼻高
蝮蛇に呑まれこしてふ　白人の顔のいろなし
澁赤のちゝらく眞髪　朝靴のひとりかきなで
とりじもの身裝飾らひ　筒袖の毛ころも着たり
こを良とまねする處女　水田曳牛の糞なす
むぎ團子つくね髪なし　さへづるや外國まねび
集はるをのこにまじり　かにかくと爭ふ見れバ
これやこの男を尻に　まき島の道ふみまよふ
醜をとめそも

天地と陰陽とむかへることわりの
くにのまさ道ふみなたがへそ

處女のなげき

藍邨生

浦ふく風の寒きにや　夜の最深くふけしにや
嵐は松にのこれども　友よぶ千鳥の聲絶ぬ
さはいへ苫屋に猶未だ　眠りかねてや糸くるま
細きわし火のほの影に　廻せる處女は誰の
生みの女子かは雖不知　なほなつかしき藤の花
濃き紫の千代の色　あせてそれ共深海松の
底の心のわびしさは　包めどあまる一雫

落す涙ともろともに　獨語りていひけらく
世は常闇となりはてゝ　物のあやめも星月夜
鎌倉山にしらはたの　たてられしより平氏
かなた此方の野に原に　敗れかさねて檀の浦
御方軍をすゝめしが　扇のかなめ波の上に
ちり乱れにしその時に　父は討死せられしと
かねて母より哀れにも　亦悲しくもきゝつるに
其母さへも吾をすてゝ　かへらぬ旅に去歳の秋
身まかりませば捨小舟　頼むなぎさも嵐ふく
世となりぬれば何で又　花さく春はあはるべき
乱れこそすれ黒髪も　まだ結ばれぬ姫小松

蝿

尾崎すう子

夏の日は、いとあはれなる物、いとにくき物、多かる中にも、はへは、殊さらなるものなりけり。人にまれ、ものにまれ、出入るものゝあとをしたひ、あるは、朝け夕けのあたりさらず、舞ひつどひ、晝はあつきにこうじて、いぎたなげに、ねたる人の貌のあたりなんども、うるさげに、飛びありきてのはて〴〵は、物の中にさへとび入りて、あつさぬるさに、わが命をうしなふよ。

前の世はいかなる物の身をかへて
かくいとはるゝ蝿と成るらむ

船路の記（つゞき）

故人　藪氏

四日、明けはてぬ間は、霧たち渡りて、嶋山も見

えねど、赤穂は過ぎぬとぞきこえぬる。漸く、日も三さをどかり、のぼりぬれど、皆人起き出で丶、ひとつ〳〵、もの言ひ出でぬ。ふるさとの夢みしなどいへど、われも、まどろみしや、ふるさとにかへりて、人々にものいひしかとおもふ。

故郷にかへると見しも浪まくら
かけてはかなきゆめの浮橋

島山うちつゞきて、めなれしも、めなれぬも、めづらしとみるに、犬島といふ島みえぬ。いつも、年の暮の夜は、犬のなく聲きこえぬるとかや。石となりぬとて、嶋のいたゞきに、石見ゆ。松も、その石のかたへに生ひて、尾をたて丶、はしるににたり。

白波を今もまもるやありしよの
かたちは石となれる犬じま

晝のうちは、舟のうちも、たゐがたくおつきに、潮か丶りして居ぬれど、浪のうをや、くらげなむど、行きかふ、をちこちに見えぬ。くらげは、水月と書ける、むべも、よくかよへるものなり。日影さへ、くまなくさし入れど、おやみがちなるに、夕かた、つく風に順ひて、帆をまきさげて、櫓をたて丶、おし行くに、心ちもさわやぎて、帆だなにあがり、よもの海づらをみて納涼ぬ。めてのかたに、ちひさき石のうへに、又小石つみたるやうなるは、何とかいふ所ぞと問へば、出さきの枕石といふとなむ。それより、なだらかなる嶋つゞきて、ふしたる姿にや見なしけむと、おかし。ゆむ手は、間ちかき嶋山、立ちあらびて、すゑおが

くつゞきたり。白きいさごの濱、廣く長し。初めて、あまの家居あるを見る。山ひとつへだてゝ、又白き濱あり。爰に、田畑つくる見えて、家はなし。むかひに、がんくびのせとゝいふあり。此のせとをこす。

雁首のせと過行けむさはの海や
吸口の島もとほらましやは

など、たはふれいへり。この所は、遠近の山つゞきて、景色おもしろく、夕月よし

ほのかにも見しみか月の夕より。
ひかり添行く影ぞすゞしき

五日、明けぼのに起き出でゝ、海の面をながむれば、霧深くして、いづくも〳〵、ほのかなり。次第〳〵に、海よりあけて、さま〳〵にわかる。舟人の、そのしまは、備中の水島、むかひに、ちひさくならびしは、ひさくのしまといふなりときこゆ。

はかりなき千尋の海の水しまに
ひさくの島もそひて見え鳧

風やみえけむ、帆をまきて、櫓をたてぬれば、此の嶋、めてにみえて行く。又ひとつ、まちかくうかみ來にけり。遠くみえしには、まさりて大きに、岩ほのかたへに、人のあげたらむやうに、丸き石のあがりて、あやふげもなきけはひに、おかしきかたちなり。みれど、あとのかたによりて、すさき半よりこして、長くこがれたれど、みるめたちまさりぬ。やがて、これもあとになれば、又ひとつの島ぞ出で來る。此の島は、初めの島より、少

し大きにして、さきにながれずあり。あとにも、沖の石の、おほくつゞきて、道をなせり。波のこすべくもあらず。さては、こすまじともみえぬさまなり。島山のあとによりて、岩ほの中の明けたる所より、むかひの、みすかさるゝあり。此の島かげより、帆をかけたる舟の、靜に出でくるも興あり。前に、石づたひの道、長くつゞきたるしもに、又ひとつの島出でぬ。此のあはひ長くして、海を二重にみれば、舟々もみなねかくれて、いとゞ、みるめふかゝりき。乘りたる舟ぞ行くめれど、さはおもほねで、ねもいはぬ島山の、ながれ行くとぞみる。舟うちこぞりて、ものをもいはで、ながめをりぬ。このおもしろき景色も、あとしらなみとなりて、蒼々たる廣き海づらとなりにけり。實に世の中のありさま、めのまへにありとおもひをりぬ。ろれ過ぎて、又行けば、三郎といふ島ありといふ。みれば、三つ打ちつゞきて、はなれもせずみゆ。

たが子ぞや青海原にやす〳〵と
産みならべたる三郎のしま

しら石のせと、むかひに見ゆ。ゆむ手の山々、長くつゞきぬ。めてのかたも山あり。その末は、遠山につゞきてぞみゆる。帆をかけたる舟ぞ、おほく行きかよふ。

かたはしもうつす筆なき心には
せかれてぞこす白石のせと

こぎ出づるまゝに、これも、左につきて、間ちかき島山立ちつゞけり。みな、かはらけいろのいさごの、高くつもりて、山となりぬれど、尾上より、

すゝれかゝりて、並木の松のみどりのいろと、いさご色のあゐにあひて、みるめまされり。磯際は、波のあらひて、いとゞ石のみ出でゝ、おのづから、つみかさなりしが、えもいはず、みるめおよびぬさまなり。いさご計りの濱も、おほくあり。磯より遠く、まろび出でし石の、かず〲ゝあつまりたるに、かもめといふ鳥の、水にうかみたるも、石にあがりたるも、むれつゝまふも、間近く、そのしまかげにかゝれる舟々にも、人にもおどろかで、鳥は遊ぶめり。

立ちゐるもひとつ波間に所得て
沖のかもめの遊ぶしづけさ

打ちつゞきて、石のかさねかさなる島に、松も生ひたるが、海の中にさし出でゝあるに、浪もあらさぬ道ありとぞみゆる。此の打ちつゞく山の奥には、弘法大師の住み給ひし堂もありとかや。むかし、高野をこゝにせむとおもひ給ひしとかや、いひ傳へ侍ると、舟人のかたりぬ。右の方も、同じ山つゞきなれど、すこし遠くみえぬ。なだらかなる山の姿おほし。なかどより、沖に少し出でゝ、間近くみゆるは、かまどなむどのごとく、つみたる石の、長く流れて、海にうきたるやうよみゆるも、やうかはりて、みるめあれや。備後の地に入り、はしり嶋は左、ふく山は右、泉水嶋は、むかひにみゐたり。とものみなとのまへとぞきゝし。

帆をかけてやがておきにぞ走嶋
ともにつれだつ舟ぞ多けれ

けふは、薄くもりてあれど、浪は、ほのかなる日

影のうつりて、白かねの色に立ち行く。銀河に舟をうかめて、さかのぼるとぞおもほえし。雲の上の星の渡りも近けれど、いとゞしきみるめなり。がざみといふ蟹の、手をかざして、波をわけ行く。

備中のかさなか山、ちかき山、遠き山のあはひに、薄霧がくれ、ほのかに見ゆ。

雨ふらで續く日よりに灘こせど
かさをか山もよそに社みれ

雜報

●人の子を傷ふ　學校は、人の子を敎へて、人とならしむる所なり。されど、もし敎ふるに、その道をえずは、遂に、之を傷ふに至りぬべし。今の世、女子の敎育も、やゝ、正しき姿に立ちかへりたれど、多きが中なる女學校には、猶、その敎ふる道をえずて、人の子を傷ふものも、少からずとか。吾人は、かうやうなる學校のありさまを、見もし、きゝもしたり。そが中に、「かの學校の内は、さながら、地獄とやらんのやうなり」とは、正しき家庭敎育を受けし女の、初めて、ある女學校に入學したる時、直に、その親に向ひて退校を願ひし時の言葉なり。はね上りたる女どもの寄り合へるを、心やさしき女の見たらむには、げに、地獄の畫の如きこゝちもえぬべし。さるにても、人

を教へて人とあらしむる學校は、之を、天堂にも比へつべき常なれど、其の道を誤るときは、地獄なりと思はしむ。いとなげかはし。世の父兄等、その子、その妹どもに物學びせんとならむ、まづ、その學校をえらぶべし。其の名にめで、その規則教課をたのみて、みだりに入學せしむべからず。學校としいはゞ、必、よきものとな思ひそ。人の子を傷ふところもいと多きがに、

●過ぎたるは　猶及ばざるが如しとは、古より定まれる道理なり。此の言葉の意は、言ふまでもなけれど、物は、中庸をえんこそ善けれ。すぎたるも、及ばざるも、共に惡しといふにはありけり。世の中のなべての事物は、必、然あらざるべからず、又、然ありてこそ、世は立ちもゆくなれ。されど、吾人は、世の女等に向ひて、猶一つ言ふべき事あり。そは、「其の過ぎんよりは、むしろ、及ばざるが如くせよ」といふ事これなり。內にありて、內の事ども司る女としては、物言はむも、事とりまかなはむも、常の立ち居振舞にも、すべて、うちはにせざるべからず。出過ぎたる女は、げに、いと惡きものなり。かうやうなる者、今の世には、甚多し。これらも、自は、中庸を得ていみじとも思ひ居るらめど、初より、中庸を得んと思ひなど、大方心淺き女の習として、知らず〳〵、過ぎたる方に趣くめり。さればこそ、女は、物事、常に、ひかへめにせむと心がけざるべからず。かく心がけたらむには、終に、中庸を失はずして、その淑德を養ひ得られなまし。

●夏になりぬ　うるさき蠅、きたなき蚤、にくむべき蚊、虻、おそるべき蝮、蜈蚣など、おひ／＼出で來めり。世の母姉たち、よく心して、食物に幼兒に、寄り來る蠅を防ぎたまへ。蠅は往々、諸種の病毒を傳播することありといふ。いぎたなう寢入りて、愛子の蚊に螫さるゝをも知らでゐるは、まだうら若き母御の常にして、餘念なう仕事に心入れて、愛妹の毒虫に嚙まるゝにも氣付かであるは、幼き姉上にまゝあることなれば、心したまへ、母御、姉上。おのが不注意より、あらぬ病あるは、生れも付かぬ傷をうけしめ、殊に甚しきは、命死ぬに至らしむるもありといふ。いとも恐るべきことにこそ。

●貞婦の賀筵　明治維新のをり、今の兵庫縣下に、多田彌太郎といへる人ありき。君を思ひ奉り、國を憂ふる志ふかく、もはら東西に奔走盡力し、その末銀山の義擧に加はり、遂に王事に斃れたりしが、一昨年中、朝廷その功勞を追思せられ、從四位を贈り、靖國神社に合祀せられたり。あはれ、榮譽のかぎりに非ずや。その未亡人富永安子といへる、また世にまれなる貞婦なるが、ことし六十になりぬとて、息信ぬし、これが賀筵をひらき、四方の詠作を受けて、以て母儀を慰めんとせらる。志あらん姉妹等、すゝんでその詠作をおくり、この貞婦を慰められよ。詠作屆所は、日向國宮崎郡宮崎町大字松山町多田信ぬし方なり。因に云ふ、左の揭ぐるは、その事實の概畧なりと。

贈從四位故多田彌太郎夫人安子事畧

安子冨永氏、福知山侯の世臣、冨永宇源太の長女なり、天保癸巳八月二十五日、丹波國福地山に生る、嘉永癸丑二月二十五日、先人に歸嫁す、是より先き、先人は、西洋諸國が、早晩此東洋に來り、追々多事ならんことを慮り、奮然長崎に至り、泰西砲術を學び、業成るに及んで、益海防の策を講ぜんが爲め、東西馳驅、然れども、常に父母の侍養を欠くを憂とせり、安子の歸嫁に及びて、代りて侍養せしむるの便を得たるにより、以來專ら國事に奔走するを得たり、其年八月、米使來航の警あり、故に先人は、益寧處に遑あらず、時に藩宰某、權を弄し政を害す、先人も、遂に其嫉み且忌む所となり、安政甲寅六月、揚り屋入りに處せられ、爾后九ヶ年の久しき間、經世の志を懷きつゝ、獄窓に苦めり、此九ヶ年間、安子は、舅姑を奉じ、幼兒(不肖信)を養育し、筆にも辭にも盡し難き艱苦を嘗めたり、文久壬戌十一月、藩宰某、奸顯れて屠腹す、乃ち先人の入牢を赦免せらる、此時に方り、時勢益急なり、故に先人は、直に上京、有志の公卿に謁し、王政復すべきを首唱し、大に畫策する所ありき、已にして、三條公等七卿に尾して、長州に赴き、其後銀山の義擧となり、其翌年、元治甲子二月二十八日、捕縛に就き、遂に非命に斃る、是に於て、安子は寡婦とはなれり、前に九年の艱苦を忍び、今又此不幸に遭ふ、失望限りなく、最早世に生きてゐるの厭はしくなり、寧ろ死するの勝れる

に如かずと、已に懐劔に伏せんと決心せり、然れども一願すれバ、上は七十餘の舅姑を如何せん、下は十歳(不肖信)と、當歳(弟久二郎)の幼兒を如何せん、故に死せんとするも死するヿを得ず、所謂進退維谷と云ふ場合にて、迷惑せしが、死は易く、生は難しと思ひ直し、先づ死するの念は止みたりき、時に先人の死体は、尚獄中に置き、家の格祿は召放され、僅に面扶持を給せられ、祖父義德は蟄居隱居、家族は閉門謹愼と云ふ藩命を蒙り、又五ヶ年の間、生活にも差支つゝ、單衣を纏うて、寒中を經るが如き、艱難至極の月日を送れり、明治戊辰正月、伏見の提報、出石に達するや、藩命祖父義德の蟄居を赦し、又先人の死体を葬るを許し、格祿舊に復す、是に於て、始めて大御代の恩澤に浴するを得たり、

右十余年間、艱苦の間に於て、能く舅姑に事へ、先人に代りて、充分の孝道を盡くし、己にして舅姑踵で沒す、其病に就くや、看護怠るなく、之を葬るや、哀を盡し、先人をして地下に安んせしむるに足れり、

以上記する所は、主として、艱難中の概要に係る、艱難中の事、尚記すべきもの多く、又家政整理上等の事、亦記すべきものありと雖ども、今之を畧し、古稀壽を祝する時期までに、詳細錄する所あらんとす、

信、今母を奉じて宮崎に在り、然れども、不肖凡庸、充分母の心を安んずる能はず、且父

母を顯すの力なく、常に恐懼に堪へざる所、此事畧を記するに當り、又一層の恐懼を加ふ、

多田信記

●又、廣告にも見ゆる如く、落合直文ぬしは、故落合直澄ぬしの三年祭に、追悼の歌を募られたり。これ又、期限内に詠送せらるべし。

兼題

六月廿日　歌……新樹　文……孝子の傳

七月五日　歌……荻の風　文……萩の詞

七月廿日　歌……月前筏　文……殘暑を見舞ふ消息

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても隨意に投稿することを得但し一週日前に本社に届くやうせらるべし

投稿者は宛名を國光社編輯部とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし特に投稿者の宿所姓名を詳に記さるべし

投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送與す並にすべての歌文は原稿到着順に女鑑敎の庭に掲載す

教の庭

六月五日兼題　深夜郭公

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

いなむしろ河内の國のかゝみばの
はゝそのかげぞ木高かりける　肥後國菊池郡隈府町　小橋　幸子

地

柞葉のめぐみのつゆのなかりせば
はなぞみくにのはしらなりける —

長野縣長野町　勝家　貞子

人

母そばのかげなかりせばよしの山
わか木の花もにほはざらまし

千葉縣印旛郡白井村　伊藤　海子

くすの若木もかをらざらまし

はしりよりなみだながらに櫻井の
諭しをそへしきみのをゝしさ　高井　繁子

培ひしきみしあらねばわかくざら
いかでのどけき花にゝほはむ　藤井　艶子

はゝそばの惠みの蔭のなかりせば
花さへ實さへいかでむすばむ　河野　文子

うみの子に敎へ諭しゝことの葉の
花ぞみくにのはしらなりける　福木　稻子

先ちしつまにもいかでおとるべき
わが子のために盡すこゝろは　瀨戸　里子

世の中の母のかゞみとききくのみづ
きよき其名はいまもくもらず　松田　靜枝

柞葉のはゝのをしへのなかりせば
くすもたきゝと朽果てなまし　橋本　數江

ふた葉より世に香しく成りにしは
此のたらちねのありてなり鬼　尾崎　直子

吾がせこにおくれてもはた君が爲
ちれとをしへし姥ざくらはも　南大路菜子

むらさきのゆかりよりいでゝ橘に　南大路正子
　幷べるはなのかぐはしきかな

ひきとめし心のうちやいかならむ　南大路芳枝
　名もたちばなの花におくれて

柞葉のかげなかりせばくすのきの　佐々有鄰子
　わか木のみどり榮えざらまし

たらちねのはゝなかりせばちで櫻　千々波橘子
　夜半の嵐にちりかはてまし

かげ高きはゝその恵みなかりせば　植木鋼子
　花たちばなはちるべかりしを

玉つるぎとりていさめし君こそは　林増子
　はゝたる者のかゞみなりけれ

君が爲ちれとをしへしたらちねの　伊藤鈴子
　はゝのいさをは高したふとし

かぐはしく千歳にのこる楠の名は　島田悦子
　母のをしへのいさをなりけり

君なくばくちや果てなんよしの山　船田竜子
　にほひいづべき峯の小ざくら

さくら木のかをりと共に君が名は　大亦隆子
　朝日のもとにてりまさるらむ

はゝそばのつゆしあらずば櫻井の　高橋政子
　かぐはしき名は殘らざらまし

柞葉のつゆのをしへのなかりせば　山田先子
　くすの若木もあだにかれまし

裏かれてのこるほづえの楠の葉に　藤澤元子
　つちかふ母ぞをゝしかりける

柞葉のめぐみのつゆのなかりせば　落合操子
　わか木の花もちりやはてなむ

世の中の母のかゞみのいさをしは　土屋貞子
　いく千代ふとも曇らざらまし

ちりて尚幾世にはふさくら井の　高橋隆子
　花まもりけるいさをしぞ思ふ

柞葉のかげによりてぞくすの木の　押尾菊子
　かぐはしき名を世に留めける

たちばなの若木の花のかぐはしく　青木春子
　匂ふいさをもはゝのみめぐみ

柞葉のはゝのおほひてそだてずば　平田多都子
　楠のわか葉の世にかをらめや

櫻井のきよきながれをくむそでに　岡　清壽子
はゝそのかげはうつりける哉

櫻井のふかきわかれを汲み別けて　岡　すみ子
ちれと訓へしことぞたふとき

君を思ふこゝろは父におとるなと　羽田三緒子
いさめをしへしますらをの母

吉野山はなとちりにし子のために　羽田千世子
さやけき名をもあげし君かな

いまはとて涙にくるゝわらはべを　櫻井　花子
諫めしはゝぞかゞみなりける

はゝ木々の名は万代にきこえけり　中村喜代井
小楠のたてしいさををともに

柞葉のかげによらずばいたづらに　久保田律子
くちやはてなん楠のわかきは

六月五日兼題
人の學校卒業をいはふ消息

天　府下芝區三田四國町　師岡千代子

一筆のはしりかきは嬉しさのあまりとゆるさせ給へさても年月の御いそしみのなみならねば今日の御式にまさしくて學の業卒へたまへるが第一の席しめ給ひて優等の褒賞をさへねさせ玉ひまた總代の御祝詞も讀上げ給ひて
かしこきわたりの行啓さへありて親しく御式見そなはせられしなど承ることよめでたしとも目出度に御一族の御よろこびいかばかりかあらん折過さず參りて御祝辭も聞取あげくはしう御ありさまもうけ給らまほしけれどいさゝか事のしげくて先は一こと取あへずきこえあぐるになむあなかしこ

地　大坂府西成郡今宮村　松田靜枝

誂る筆さへあやしう躍る計のよろこびしさましてみ心のうち嘸かしとおしはかられてなむこの年頃いそしみたまひし功むなしからずまだ十五にも足らぬ御年にてはやも高等小學校の業ををへたまひしといとゞ久方の月の桂もをる計といへるむかし忍ばれて我が身恥かしうなむこたびの試驗はことにすぐれし成蹟にておはしましゝとかやあはれともすれば人は慢心とかいへる心のやまひにかゝり

易しといへばひとりを慎むといふことを朝に夕に忘れたまはずひたすら學びの道を勵み玉ひなば遠からず御身は明治の紫式部とも歌はれ玉はむあはれたのもしきは御身の行末にこそ御身の杖とも柱ともさては力艸とも頼み玉ふ御母上のうれしさそもいかばかりぞやとりいそぎ雲井の鴈のはしりがきも乱れ〳〵し筆のあとこは嬉しまぎれのすさびとも見たまへかしあなかしこ

人

千葉縣佐倉町宮小路町　植木鋼子

石上ふりにし世はたゞ一すぢの學びの道だに女の身としてなしとぐるはいと難き事にいひならはしたるをまして今ひらけ行御代には數多き學びの道奥深き山に志をりをたづねなみ荒き海に船路をもとめいくとせたわまぬ御心もてつとめはげみ給ひぬるいさをあらはれてこたび某校の卒業試驗にあまたの人を打越一の位を志め給ひぬる事誠にこよなきほまれ又此校の光りともいはましややがて行末は大御國幾千萬の姉妹が敎育の母ともあふぎ外つ國までも其名をかゞやかし給はんとゆかしう志のもるゝまゝいさゝか心ばかりのよろこび聞えまゐらするになむかしこ

福木いね子

年ごろ御いそしみのしるしあらはれて高等女學校の業をとゞこほりなく終へ給ひ去る日文部大臣の御前にて榮譽あるゆるしの文を受けさせ給ひぬとかそこの御よろこびは申すもおろかにて故郷に朝な夕な指をりかぞへて待たせ給ふらんたらちねの君だちの御よろこびいかばかりならん古の人も名をあげ父母の名をあらはすは孝の終りとかのたまひしをそこは巳に其道をさへつくしたまへるよと思へばとし比かたゐなかに侍りてなすこともなく父母の心をやすめ奉る術さへ知らですごしぬる事の口惜しさよいま更にうらやみまゐらするも何のかひかは侍らん扨此後御國の礎となるべき心正しく才すぐれたらん人の幾人か御元より成り出づらんと思へばけふの御ほまれのみならず後の日の御榮やいかばかりならんとうれしさの余りやくな

きことを一言きこえまつるになんおなかしこ

佐々有鄰子

いとなめげなれど筆にまかせてきこえあげ侍る學校もさまざまにわかれたるものからいづれよけんとためらふうち月日は矢のごとくすぎゆくに貴孃はひらきもの心を一にして縣立の尋常中學校を卒業なしたまひぬとかいとゞけ高うなんおはれ今日よりゆくさきは高等中學校も大學校も卒業して久かたの天の下に錦をかざりて父母の名をも天の下にとゞろかしたまへと祝ひ奉りてかくなむ

おなかしこ

伊藤すゞ子

一筆申上候偖承はれど御令孃此頃華族女學校無滯御卒業遊ばされ候よし誠に目出度奉存候殊に御優等の御出來にて証狀授與の節は生徒御惣代として御答辭御捧げなされ候趣御令孃の御名譽御うらやましく奉存候御答辭をも拜誦仕度候間いづれ近日參堂仕べく候へ共先は右御祝ひのしるしまでに粗品ながら扇子一箱進じ候　御受納下され候はゞ御嬉しく存候かしこ

島田　悅子

仄かに聞きつるにこたびおん身にはけなげにも同窓數多の諸孃にもいやまさりて高等女學校を卒業なされしとの事日頃むつみて交りを辱うせしわらは迄も何となう肩身の廣き心地し侍り顧みれど敎の庭に入りし其日も早や三歳の昔とはなりぬ其間は雨の日も風吹く日にも怠らず艱難辛苦の功を積み只管に學の道を勵ませられ其高きいさをの遂げし今日ころたらちねの父母は勿論祖父母の喜悅おしはかられて羨ましさはあれど務むる道はなほ深く夫にまみえし曉は貞婦淑女の德をもて世の中のをみな達の手本とならせまほしく倘兒女を育つることまでも今よりおん心に留めらるれどこよなきとになん

大亦　隆子

光陰に關守なしとかや御入學あらせられしもこのごろのやうに思ひ侍りしにはやくも螢雪のいそしみなりてこたびそれの女學校御卒業あらせられ優

等の証うけねさせ給ひぬとうけたまはりうれしともめで度とも人事ならず思ひ侍りぬまいて御一族方のおんよろこびの程思ひやりまつりてなむ同じ學の友垣のわらはがわけ入にし文の林はをこたりの雲にへだてられ青葉の枝も折りえぬを常々の御いそしみの功かも早くも思ひの山に分け登りたまひ花をも實をも折りえさせられおん身がふるさとに飾り給ふ錦の衣ひとしほの光を添へ玉ふらむと妾が學の道のをこたりをもいまさらのやうに面ぶせなうおぼえ侍りぬ猶々をこたりなく學のおくかをきはめ女子の美徳をみがき給へかしわらはもこむとしの春を待ち都のたびにかりねせむかまへに侍れど其折にこそおんことぶきもまをしおんみが學の林にいそしみのおんものがたりもうけたまはらむをとたのしみ居りはべるになむ

あはれ君よわらはがなめげなる拙き筆の跡學びの道のたど／＼しさをみゆるされ給はらむことよなき妾が幸なりやあなかしこ

勝家　貞子

年頃の御くはだて日頃の御いそしみの程めでたくとゝのはせ給ひ今日しもみゆるしの御文とともにその御功のあらはれ給ひてまた一しほのうるはしき色香をそへて四方にははせ給ふらむこれまでに御自身ばかりの名譽のみかは御兩親樣の御名をもあらはし給ふ御事にて御一族樣もさぞ／＼御滿足の事と御喜び申上參らせ候是と申すもひとへに御兩親樣の御志の淺からぬ故にしあれば猶この後も御いそしみの程專一と祈り上げまゐらせ候かしこ

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇内の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

國光

每月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第參號目錄

發行所
麹町區平川町五丁目
國光社

女鑑第三十九號目次

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

本年は亡叔落合直澄三周年に相當候に付追悼のため左の二題により廣く江湖諸彦の玉詠を募り候處はや三千餘首に達したりこゝに六月廿日までその期を延べし候間猶續々御投寄のほど偏に願ひ上候追て御投寄下され候御方へは編纂の上一部つゝ進呈仕るへく候間御住所御姓名等詳細に御記載下され度候也

兼題｛寄書懷舊
　　　夢　春

明治二十六年五月

東京本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文

明治廿六年六月四日印刷
同　年同月五日發行

發行兼印刷人　東京麹町區平川町六丁目十二番地　川崎直衛
編輯人　東京麹町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　同　國光社

（赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行）